平成 30 年

子育て文教委員会
国内(管外)行政調査報告書

（平成 30 年8月 28 日～8月 30 日）

千代田区議会

目　次

Ⅰ　調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ１

Ⅱ　調査先自治体の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ３

Ⅲ　各調査場所

（１）陸前高田市役所・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ４

（２）陸前高田市立高田東中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ12

（３）大船渡市立越喜来小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ18

（４）岩手県立大槌高等学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ35

（５）釜石鵜住居復興スタジアム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ40

（６）釜石市立鵜住居幼稚園・小学校、釜石東中学校・・・・・・・・Ｐ46

（７）大槌町立大槌学園・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ47

Ⅳ　全体を通じての意見・感想等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ70

Ⅴ　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ74

表紙写真の説明

左側　**奇跡の一本松（陸前高田市）**

東日本大震災による津波の直撃を受け、ほとんどの松の木が壊滅した中、一本の木が津波に耐えて、立ったままの状態で残ったことから、震災からの復興への希望を象徴するものとして「奇跡の一本松」と呼ばれるようになった。

右側　**ど根性ポプラ（大船渡市）**

昭和三陸地震、チリ地震、東日本大震災と３度の地震の津波に耐えた、高さ約25mのポプラの木で、特に東日本大震災では、ほぼ壊滅した三陸町越喜来地区の中央に１本だけあって、津波に飲まれながらも倒れずに耐え抜いたことから、地元住民の間でその名が付けられた。

Ⅰ　調査概要

１．調査事項

岩手県内の教育施設（小学校、中学校、高等学校）における防災対策等

２．目的及び理由

東日本大震災後に再建された教育施設における地域の防災拠点としての機能、防災教育、震災復興に向けて生徒が主体的に取り組んでいる事例及び復興・発展を担う子どもの育成を目指した教育活動等の先進事例を調査し、今後の委員会での議論の参考とする。

３．実施日時

平成３０年８月２８日（火）～３０日（木）　２泊３日

４．参加者

（１）委　　員（８名）

委員長	戸張　孝次郎	副委員長	たかざわ　秀行
委　員	秋谷　こうき	委　員	池田　とものり
委　員	牛尾　耕二郎	委　員	小林　たかや
委　員	内田　直之	委　員	小林　やすお

（２）理事者（２名）

子ども部長　大矢　栄一

子ども部参事（子ども総務課長事務取扱）　安田　昌一

（３）区議会事務局　（２名）

議事担当係長　　前田　美知太郎

議事担当係長　　橋場　広明（担当書記）

５．調査場所（いずれも岩手県）

（１）陸前高田市役所（陸前高田市高田町字鳴石 42-5）

（２）陸前高田市立高田東中学校（陸前高田市米崎町字和方 130-1）

（３）大船渡市立越喜来小学校（大船渡市三陸町越喜来字小出 24-4）

（４）岩手県立大槌高等学校（上閉伊郡大槌町大槌 15-71-1）

（５）釜石鵜住居復興スタジアム（釜石市鵜住居町 18-5-1）

（６）釜石市立鵜住居幼稚園・小学校、釜石東中学校（釜石市鵜住居町 13-20-3）

（７）大槌町立大槌学園（上閉伊郡大槌町大槌 15-71-9）

６．経費

経費合計　988,692 円

（内訳：旅費　736,572 円、バス借り上げ　227,400 円、視察先手土産　24,720 円）

７．調査行程

８月２８日（火）

　　ＪＲ上野駅中央改札集合　　～　ＪＲ上野駅（新幹線）

～　ＪＲ一ノ関駅（借上げバス乗車）

～　昼食場所（昼食）　　～　陸前高田市役所【視察】

～　高田東中学校【視察】　　～　宿泊場所（宿泊）

８月２９日（水）

　　宿泊場所　出発　　～　三陸鉄道　盛駅（三陸鉄道南リアス線）

～　三陸鉄道　三陸駅　　～　越喜来小学校【視察】

～　昼食場所（昼食）　　～　大槌高等学校【視察】

～　釜石鵜住居復興スタジアム【視察】

～　鵜住居幼稚園・小学校、釜石東中学校【外から見学】

～　宿泊場所（宿泊）

８月３０日（木）

　　宿泊場所　出発　　～　大槌学園【視察】

～　昼食場所（昼食）　　～　ＪＲ新花巻駅（借り上げバス下車、新幹線）

～　ＪＲ上野駅（解散）

Ⅱ　調査先自治体の状況

（１）基礎情報

平成 30 年８月末現在

市町名	人口／世帯数	面積	市・町長	花・鳥・木
陸前高田市	19,270 人／ 7,599 世帯	231.94 ㎢	戸羽　太	つばき・かもめ・すぎ
大船渡市	36,795 人／15,031 世帯	322.51 ㎢	戸田　公明	つばき・うみねこ・まつ
釜石市	34,055 人／16,634 世帯	440.34 ㎢	野田　武則	はまゆり・たぶのき・おおみずなぎどり
大槌町	11,974 人／ 5,426 世帯	200.42 ㎢	平野　公三	新山つつじ・かもめ・けやき

各市町のホームページ等より抜粋、人口／世帯数は住民基本台帳による

（２）被災状況

平成 25 年２月 28 日現在

市町名	人的被害					建物被害
	死者	行方不明者	負傷者	合計	対人口割合	家屋倒壊
陸前高田市	1,556 人	217 人	不明	1,773 人	7.6%	3,341 棟
大船渡市	340 人	80 人	不明	420 人	1.0%	3,934 棟
釜石市	888 人	152 人	不明	1,040 人	2.6%	3,665 棟
大槌町	803 人	437 人	不明	1,240 人	8.2%	3,717 棟

『岩手県東日本大震災津波の記録』（平成 25 年３月初版、企画・発行　岩手県）より
家屋倒壊数は全壊＋半壊数、人口は平成 22 年国勢調査による

Ⅲ　各調査場所

（１）陸前高田市役所

①中村防災対策監より

・本市は津波の防災に対しては熱心だった。毎年５月に津波を想定した避難訓練、自主防災組織が沿岸部に関しては 100％組織化されて行われていた。しかし結果としては 1,750 人以上の死者・不明者（関連死含む）を出してしまった。

・熱心に訓練していたにもかかわらず、なぜこれほど被害が大きくなったのか。残された我々にできることは、被災状況を的確に把握し、そこから出された反省や課題を整理し、検証することである。

・これが本市の「東日本大震災検証報告書」の発刊理由であり、被害を部分的に検証している自治体はあるが、まち全体の状況を検証している自治体は少ない。本市と同規模の自治体ではほとんど例がないのではないか。

・本市の震度は推定で６弱である。「推定」なのは、本市にある地震計のデータが正確に送信されず欠損となっているためであり、近隣自治体の地震計から推測したものである。

・浸水面積は 13 ㎢であり、市全体の面積の約 5％だが、市の中心街など人口密集地域は全て浸水してしまった。

・本市は津波の常襲地帯だが、今回は津波に襲われたことのない地域も浸水してしまった。

・津波に関する伝承はいくつもあるが、それを 100％信じ切ってしまったため、被害が拡大した。

・一例として、ＪＲ大船渡線（現在ではＢＲＴ）は、海岸沿いの高台を走っていたが、昭和 35 年のチリ沖地震津波で、当時 5.5ｍの防潮堤をはじめて超え、まちの中心地の高田町が浸水した。明治以降ここが浸水することがなかったが、偶然、大船渡線の線路で津波が止まった。いつしか津波が来ても大船渡線で止まるという迷信みたいなことが言い伝えられて、人々は信じ切ってしまった。

・チリ地震津波は比較的速度がゆっくりだった。昭和８年の地震を経験している人が少なくなり、チリ地震津波のような襲い方をすると言い伝えられてしまっており、こうしたことが被害拡大の要因となった。

・言い伝え、伝承が間違いないのかを検証しないといけないことを教訓として学んだ。

・住家被害は 8,069 世帯中 4,041 世帯と約半数が全壊、半壊した。

・建物が地震の揺れによって損傷しているケースはほとんど確認できなかった。木造家屋が耐えられるような周期の地震だったため、旧耐震基準の家もほとんど無事だった。

・避難が何より重要である。生き残った方へのインタビューと、亡くなられた方については、その人の行動をよく知る人（家族、職場の同僚など）から得られた情報を元にデータ化したのだが、津波で亡くなった・行方不明になった方の約４割が避難しておらず、助かった人の約８割は地震発生直後又は津波が到達する前に避難を開始していた。

・有名な「釜石の奇跡」と同じように「陸前高田の奇跡」も起こっている。奇跡の一本松の近くのに気仙中学校の校舎があり、一番海に近い中学校だったが、学校の管理下にあった生徒の犠牲者はゼロだった。

・当時は宮城県沖を震源とする地震を想定しており、津波は防潮堤を超えたとしても、深いところで１～２ｍ程度の浸水としており、市もそれを元に避難場所を決めていた。しかし、大きな揺れを体感した地域住民が、尋常な揺れではない、大きな津波が来るのでもっと高台に避難した方が良いと言い、

難を逃れた例もあった。
・広田中学校の隣に保育園があったが、中学生が園児を負ぶって避難するなど、率先して手伝ったために助かったという事例もあった。
・なぜ避難がうまくいったのかというと、訓練をしっかりしていたからである。大人にも言えることだが、訓練でできたことは本番でもできるが、訓練でやっていないことは本番ではできない。パニック時にどちらの方向に逃げればいいのかということは口でいうだけでなく、訓練により体に染みついてないと実践できない。
・報告書には、津波から命を守る場所として市が指定した一時避難所の一覧が掲載されている。一時避難場所は当時 67 か所あった。そのうち 38 か所が津波で浸水した。さらにそのうち 9 か所で 303～411 人位の方が亡くなっている。
・一番犠牲者が出てしまったのが高田町の市民会館で、130～170 人の方が亡くなられている。
・緊急避難ビル（垂直避難）という考えがある。陸前高田市は三陸の地形の中でも比較的平野が広く、海岸から高台まで約２ｋｍの距離がある。したがって津波が到達する時刻の 30 分前までに高台に逃げることは難しい。そこで当時市内にあった三階建ての市民会館を緊急避難ビルとした。
・当時、ここは 50ｃｍから１ｍ程度浸水すると想定しており、垂直避難で命を守れると考えていたが、実際には 17ｍの津波が到達しており、３階の屋根も全部飲み込まれてしまった。
・指定した方が悪かったのかという議論もあるが、指定したことだけが全て悪いとは言い切れない。もともと予想されていた浸水予想図（シミュレーション）をいつしか絶対信じ切ってしまったのが反省すべきポイントである。シミュレーション通りに災害が起こるものだということが植え付けられてしまっていた。
・想定がないと避難予想図も作れず、避難所も整備できないが、頭の片隅にそれ以上のものが来るという危機感を持っていれば、この建物から別の高台に避難することができた人もいたかもしれない。
・あるいは揺れ方が大きかったからシミュレーション以上のものが来る、シミュレーションはあくまでシミュレーションだということで避難する人がいれば、もう少し助かった命があったかもしれない。
・行政が示しているものはあくまでも１つの想定、参考であるということ強く伝えたい。子ども達にハザードマップなどを渡して説明するときにもそのようなことを話している。
・避難所に逃げたら終わりではなく、できる限り逃げられることころまで逃げるのが避難だということ、安全なところまで避難してくださいということを教訓として伝えている。
・今は東日本大震災で１ｃｍでも浸水したところは避難所として指定していない。また、一時避難所を 140 か所くらい指定しているが、「二度逃げ」、まずは指定した場所に避難し、そこで終わりにしてしまわないよう、さらにもっと高いところに上がれたり高台に続いているようなところを指定しており、貪欲に避難していただくよう、伝えている。
・避難マニュアルにも「避難とは命を守る行動」なので、決して避難所や避難場所に行くことが避難ではないということを子ども達を含め、皆さんに伝えている。
・日本全国の津波防災、河川の浸水に対しての考え方で共通しているものとして、ハードとソフトを組み合わせないといけないということがある。防潮堤は 12.5ｍの高さで設置している。震災前は 5.5ｍだった。７ｍ高くなっているので安心する方もいるかと思うが、それだけでは守り切れないということを伝えていきたい。
・子ども達からこんな質問があった。東日本大震災の時の津波の高さは何メートルか、13.8ｍ～14ｍは来たねというと、子ども達の顔色が変わる。東日本大震災の時の津波が来たら防潮堤の高さが足りな

いのでは、そうだね足りないね。なぜ14mの高さの防潮堤を作らなかったのですか。そこで子ども達に考えてもらうため、何mの防潮堤を作ればみんなの命が守れますかと聞くと、子ども達も気づく。絶対という数字はない。防潮堤はみんなの逃げる時間を少しでも稼ぐものなのだ、避難しないでいいという訳ではないということをしっかりと伝えていきたい。

・何があってもハード（防潮堤）だけでは十分ではなくソフト（避難）も必要なんだということを伝えていきたい。

・震災から7年が経過し、今年、小学校に入学してきた子は震災後に生まれた子、震災を知らない子である。

・被災地であるがゆえに、他の自治体の子ども達と同じようにゼロから教えてあげなければならない。今の6年生も小さかった時のことであり、何か混乱しているという記憶はあるが、実際どのような避難をしたのかということは全然わからない子どももいるので、被災した自治体であっても防災に関する情報を基礎から伝えていかなければならない。

・検証報告書を作成した後に、「教訓を生かすとか後世に残すとか言うのは簡単だが、いつしか風化するのでは」との指摘を受け、教訓を生かした独自の避難マニュアルを作った。

・同時に避難所の運営マニュアルもゼロから作り直した。避難所を子どもから大人までがしっかり使えるにはどうしたらいいのかを考えて作った。

・市の職員も亡くなっているので、職員の命を守るための初動マニュアルも作った。教訓として生かしていきたい。

・小学生や小さな子どもに少しでも興味を持ってもらうためにはどうしたらいいかを考え、イラストを多く使った。

・避難に関する情報、地震への備えなどの部分を見てもらうと分かるが、イラストと文字もできるだけわかりやすいようにすることを心掛けた。極端な話、絵を見ているだけで地震が起こったらどういうことに気を付ければいいのかが絵の順番で分かるように心掛けた。

・東京防災はすごい冊子だが、そこまでのものではなくても、重要なことだけはイラストで子ども達に伝えていきたいということで作った。

・子ども達に、自分の身は自分で守るように意識してもらうことは当然だが、大人の防災意識を啓発するには、子どもの力が欠かせない。

・被災自治体でも7年経過すると少しづつ風化して、防災知識、意識が低下していることは否定できない。

・子どもに興味を持ってもらうことを通じて大人にも興味を持ってもらう目的で、去年から消防防災フェスタを開いている。市役所向かい側の消防防災センターを会場に、子ども達が喜ぶようなこと、消防車に乗ったり、消防士の服装をしてホースを持ったり、煙体験をするなどをしてもらい、あるいは映像を見てもらったり、防災無線の機械を見てもらったりした。

・防災イベントをやっても役員や高齢者は参加率がいいが、20、30 代の若い人の参加は本市でも少ない。しかし昨年このような形でやったら人口1万9千人程度の本市で400人超の参加があった。普段の防災行事では見たことのないような人もいた。

・よくよく聞くと子どもに連れてこられたということで、お父さんお母さんも「こういう備蓄が必要なのか」「こういう情報が市から出ているのか」などを意識してもらい学んでもらった。今年も10月に実施する予定だ。

・子どもから仕掛けていくという意味では防災教育の重要性は高いと考える。

・防災マイスターという制度を今年からスタートした。防災士の取得は東京なら会場も近いし講習会も頻繁に行われているので取得しやすいが、本市で取得しようとすると、まず研修で東京に１泊２日位で行かなければならず、１人 10 万円程度の費用がかかる。もう少し敷居を低くして、市民が簡単に近くで学べるということで、防災士に内容が似ている本制度を導入した。
・市内で５～12 月、毎月第三日曜日に３時間、東京から大学の先生などにも来ていただき、防災に関する授業、ワークショップなどを行い、フィールドワークで防潮堤や水門の見学などをしながら防災に興味を持ってもらった。
・防災マイスターに地域で防災リーダーになっていただこうと考えている。現在 48 名が受講中だが、参加基準、資格は中学生からとしており、実際に２名の中学生が参加している。高校生も３人、学校の先生も３名参加している。
・地方では、中学生は防災組織上、支援する側の立場である。中学生も立派な防災の担い手という意識を持ってもらうため、参加基準を広げた。
・こうした講習などを通じて、学校のみならず市全体をフィールドとして子ども達が学べる、あるいは大人、子どもと区切ることなくみんなが学ぶべき教訓を勉強していただいたり、伝えたりしている。

質疑応答

★今回の西日本の集中豪雨でもそうだったが、いくらハザードマップを作っても、警報を出しても実際に避難しない人が多かった。このように防災教育をやっている中で、そのような意識が改善されたという実感はあるのか。**（内田委員）**

⇒朝日新聞にも実際に避難したのは３％という記事が出ていたが、本市でも津波注意報が東日本大震災後も何回か出ているのだが、それにより避難した人は少ないのが現実である。正常化のバイアスというのか、人は自分だけは大丈夫だろうと考えがちである。

　得策はないが、２年前、岩手県に台風が初上陸した時、東北初上陸ということで騒ぎになった。事前に情報を得ており、避難を呼びかけたがなかなか避難してくれなかった。その時は防災無線の文言を変えて、「過去に経験したことのないような」「命の危険に及ぶ」というような脅し文句で、それが空振りになってもいいという気持ちで放送したところ、その直後には避難者が増えた。言葉は良くないかもしれないが、緊張感を持ってもらうには、脅かしというか、大げさに伝える、いつもと違う伝え方をすることが有効だと考える。

★この報告書は非常に教訓的に素晴らしいものである。この避難マニュアルは学校現場でどのように使われているのか。これを広げていく努力なり方針なりがあれば聞かせてほしい。また、これだけの報告書をまとめる際の苦労話を聞かせてほしい。**（牛尾委員）**

⇒これとは別に学校の副教材も作っている。小学校４年生で防災について学ぶ時間があるが、いくつかの学校に私たちが出向いてマニュアルを使いながら話をすることをやっている。

　子ども達の疑問に答えるということで、そもそもこのような地震・津波が発生するメカニズムや子どもが聞きたいことをＱ＆Ａ形式で話している。特に備蓄のこととか、家に帰った時に家族に話してほしいと言っている。

　全市民が被災したといっても過言ではない。被災の度合いが違うだけである。度合いによって今回の震災の捉え方が違っている。当時２万４千人位の人口があり、２万４千通りの経験がある。１冊の報告書にまとめたときに、市民全員の経験や気持ちは反映できていないと思う。その点、お叱りを受けたり検証内容が不十分という指摘もあった。

主観的な意見もあったが、なるべく客観的な事実を記載した。私はよそ者なので、外部の人間に作れるはずがないと言われたが、逆に外から来た人間だからこそ自信を持って客観的に作ろうということでまとめた。

苦労話としては、一人ひとりの話を聞くときに、その人の考えを報告書に反映できなくて辛かったというのはある。

廃校になった中学校の校舎を使い、震災前から立教大学と交流があり、また地元岩手大学の支援をいただく中で、防災に関して全国世界に発信していこうということで研修、セミナーを行っている。来週日曜日に講師をするが、全国の学生やＪＩＣＡの方にきていただいたり、行政の視察を行うこともある。

一方で我々も民間企業の研修も含めて出向いている。先だってはトヨタ自動車本社に行き、我々の経験を話した。もしよければ千代田区にも呼んでいただきたい。

★先ほどの気仙中学校の避難の話だが、地元の人の意見を聞き、最終的には教師たちが話し合ってさらに高台に移動することになったのか。**（小林や委員）**

⇒そのとおりだ。

②斎藤学校教育課課長補佐より

・本市は震災以降、重要施策として生徒・児童たちが自分たちの命を自分たちの力で切り開いていく力を育成する目的で、防災教育には重点的に取り組んでいるところである。

・「主体的に判断し、行動できる力」の育成、「安全・安心な社会づくりへ進んで貢献しようとする態度」の育成として、マニュアル通りだと自分の命が守れない状況で、自分で判断して、もっと高いところに逃げた方がいいだろうというような力を身に着けてもらおうというのが防災教育の狙いである。

・学校での取り組み内容の例として、まず「調べ学習」がある。自然災害の仕組みや危険性として、自然災害のメカニズム、津波がどうやって起きているのかなどを教えている。また、地域の災害の歴史として、本市のこれまでの津波の経緯・歴史なども副読本などを通じて学んでもらっている。

・地域の安全な場所、危険な場所についてということで、各学校、地域で違うのだが、この学校だったらどこに逃げたらいいか、自分の家の周りだったらどこに逃げた方がいいかなどをマップに落とし込んだりしている。

・次に「考える学習」である。どうやったら災害に強いまちにしていけるか生徒の視点で考えてもらったり、もしもの時の避難や対処法を、当然避難訓練はやっているが、話し合って考えてもらうこともやっている。

・また地域の未来について考えるということで、これからの本市がどのようになったらいいかということを生徒自身で考えてもらっている。

・次に「体験学習」である。もしもの時の対処法として、水、トイレ、寒さをどうするかというのがある。各家庭で水を備蓄しているのかなどの確認や高田東中学校もそうだが、非常時にトイレが使えなくなった時のためにマンホール直結型のトイレが整備されているので、そうしたものの確認もやっている。

・非常食を食べてみようということもやっている。各学校に非常食が備えられているが、賞味期限が切れそうになったものを食べてみて、どういったものなのかを実際に経験してもらっている。

・最後は「親子で学ぶ学習」である。例えば参観日を使い、「親子防災教室」など親に対しても防災に対する意識を高める授業を行っている。その中で家族防災会議を開こうということを啓発したり、親子

で防災グッズを作成している。
・各家庭で懐中電灯など、どういったものが必要か副読本にも挙げられているので、チェックをして、今、家にあるのが何かを確認してもらうようにしている。
・授業は各学校にお任せしているが、多いところは年間で 10 コマを防災教育に充てている。
・防災教育を通じて、「必要な避難行動や防災知識を身に付けることで、自分の命を大切に守ろうという意識が高まっている」「災害を含めた地域の歴史を知り、地域の復興に関心を持ったり関わりを持とういう意識の醸成につながっている」「震災津波を踏まえた命の大切さや人への優しさを考える機会ともなっている」という成果が上がっていると考えている。
・確かに地震が起きたら机の下に隠れるとか外に出るというのは必要だが、命の危険性は予期せぬ時にこそ高まる。その時に自分の判断で避難できる能力が必要である。
・地震が起きたとき、日中だと学校にいるので、先生に従って避難できるが、一人だったり周りに大人がいなかった時に子どもが自分の判断で高いところに避難し、そうした行動を見て、躊躇している年配者もつられて避難する。それを見てさらに他の人も避難する。一人ひとりの意識を高めることで、そのような連鎖が起き、波及していくことを期待している。
・教材として使っている副読本は平成 27 年に製本化したもので、各学校、全生徒に配布して授業で取り入れているところである。
・本市で起こりうる自然災害には地震津波のほかに土砂災害などもあるので、そういった災害時の対応や事前の備え、あるいは東日本大震災の時には数多くの支援・協力をいただいたので、それに対する感謝の気持ち、産業・伝統文化、新たなまちづくりへの願い等、児童・生徒が受け継ぎ、語り継いでいくべきことをこの副読本に凝縮した。
・今後の位置づけだが、７年が経過し、震災の記憶が薄れてある程度は風化してきたというのがある。自分の娘もそうだが、今の小学校１年生は震災の年に生まれており、震災の記憶、自分が被災地という特別なところに生まれて育ったという意識がない。
・だが、防災教育を通じて、自分が特殊なところにいるというのは勉強できる。防災意識を植え付けることにより、本市では防災教育が熱心に行われているということを、高校生・大学生や社会人になってほかの地域に行ったときに、その地域の人にも広めることができるし、それが震災の記憶を風化させないことにつながるのではないかと思う。今後もこうしたことを学校教育の中で、授業の中で取り組んでいく。
・毎年１月に防災教育会というのを開いている。３校くらいの代表に学校で取り組んだ防災教育のプレゼンをしてもらう。そこには岩手大学の先生がいて、防災に関する講義をしてもらっている。

質疑応答

★東日本大震災以前もこういう取組みをしていたのか。**（小林や委員）**
⇒以前も避難訓練などはやっていた。ただ、ここまで細かくきっちりとはやっていなかった。震災後はより意識の高まった具体的な、震災の経験を踏まえたことをやるようになった。
★震災の映像を知らない子に見せていく方向性なのか。**（小林や委員）**
⇒将来的には各学校に任せるところはあるが、避難訓練をやっていると海が見えるのが怖いという生徒も中にはいるようだ。もし見せるということになればその方がリアルに伝えられる。
★戦争体験ではないが、語り部を起用することは考えてないのか。**（小林や委員）**
⇒風化させないためには必要だと思うが、一方でメンタル的にダメな子もいる。

★防災マップについて、自分の住んでいる近くの小学校でも日本損害保険協会の主導で小学生が集まって防災マップを一生懸命作っているのだが、被災地の小学校の児童・生徒の作る防災マップは迫力が違うと感じる。被災地として辛い思いをして作られたものなんだなと児童・保護者も言っていた。防災マップを作るときに、大人の方からこのようにすればいいのが作れるというアドバイスはあるのか。それを聞いて自分も地域の小学生に伝えられればいいと思っている。**（秋谷委員）**

⇒逆に、この危険な区域があったのか教えてほしいという用紙を子どもに渡して記入してもらった。大人に子どもから教えてもらうという形のやり方が一例だと思う。

★消防防災フェスタに子どもが大人を連れてきたという話があったが、そのイベントと教育委員会とはどういう連携を取っているのか。**（戸張委員長）**

⇒防災課からチラシが来て、それを学校に配るなど周知はしている。

★教育委員会のスタッフがそこに行って、一緒に汗をかいてやるようなことはあるのか**（戸張委員長）**

⇒それはしていない。

★震災直後に登校するのは無理だと思うが、実際に校舎が被害にあった学校は、教育活動ができないので、他の教育活動ができる学校に分散したという話を聞いたが、教育委員会としては地域で分けるなどしたのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒例えばＡ小学校が被災して使えないとなると、近くのＢ小学校で授業をするというようにした。

★その場合は、Ｂ小学校の同じ学年のクラスで一緒に教育を受ける形なのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒高田東中学校はもともと広田、米崎と３つの中学校が統合した学校である。仮校舎となった小学校では中学校も授業をした。ただし学校の中では小・中と分けて授業を行っていた。

★小中学校の中では避難所になっているところがいくつかあった。そこでは避難している人がいる中で教育活動を並行して行っていたのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒そのとおりである。避難所として一番大きかった高田第一中学校には最終的に 8/12 まで避難者がいた。震災後に校長会を開き、4/20 の学校再開をめざすことを確認した。そして１つの学校に小中学生が混在するところでも授業再開をめざした。

★縁者を頼って県外に出た方もいるのか。**（たかざわ委員）**

⇒およそ 100 名超の方々が市内からいなくなったと記憶している。

★主体的に判断し、行動できる力の育成はいいことだと思うが、主体的に判断した場合に、学校の先生がこうしなさいという時にも主体的に判断してしまうのか。相反するが、教師や地域の人がこうした方がいいと言っても、生徒がそれぞれに判断して行動した方がいいという考えなのか。**（大矢部長）**

⇒伝えたいことは、マニュアルがあり、そこに避難所が書いてあり、そこに避難すれば大丈夫だと思い込まないようにしてもらうことだ。想定外のことが起きたときに、このままでは危険だと思ったらより安全なところへ避難できる発想、力を身に付けてもらいたいということを主体的な判断と言っている。

委員・理事者の意見・感想等

★マニュアル通りだと自分の命が守れない状況下で、自分で判断して、より安全な場所に避難できる力を身に付けることをめざし、「（災害時にも）主体的に判断し、行動できる力」、「安全・安心な社会づくりへ進んで貢献しようとする態度」の育成を図っている。具体的には、各学校で「調べ学習」「考える学習」「体験学習」「親子で学ぶ学習」に取り組んでいるが、自分の命を大切に守ろうという意識の高まりや地域の復興に関心を持とうという意識の醸成など、一定の成果が出ていると感じた。

（戸張委員長）

★中村防災対策監が元千代田区在勤者ということで親近感があり聞きやすかった。仮設の役所も含め、まだまだ復旧復興には時間がかかりそうだ。その後に各地で発生した震災、災害での復旧工事、2020東京大会に向けた整備工事、人・重機・資材すべてに追いついていないことを実感した。**（池田委員）**

★震災の教訓を踏まえた防災教育、その他、学校施設等における防災対策について調査した。市の防災課防災対策監は防災に関する専門的知見を有する有為な外部人材を登用している。震災の教訓を忘れず、風化させないために、防災教育を市の重点教育課題として小中学校の教育課程に体系的に位置付けている点で評価できる。**（安田参事）**

仮設の庁舎である陸前高田市役所

説明会場の市議会議場

中村防災対策監
主に防災対策についてお話をいただいた

斎藤学校教育課課長補佐
主に防災教育についてお話をいただいた

陸前高田市防災教育副読本「明日のために」

陸前高田市「東日本大大震災記録誌」

（２）陸前高田市立高田東中学校

施設概要

■敷地

用地面積 34,693 ㎡（屋外運動場 10,964 ㎡、テニスコート３面）

■建物

・校舎棟

鉄筋コンクリート造、一部木造及び鉄骨造　２階建

延床面積 4,493 ㎡（１階：1,879 ㎡、２階：2,614 ㎡）

・屋内運動場棟（体育館）

鉄筋コンクリート造、一部木造及び鉄骨造　２階建

延床面積 1,995 ㎡（１階：1,587 ㎡、２階：408 ㎡）

・武道場棟

鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造　２階建

延床面積 537 ㎡（１階：193 ㎡、２階：344 ㎡）

工事概要

■敷地造成工事

施　工：及常建設・山徳建設経常建設共同企業体

工　期：平成 26 年３月 20 日～平成 27 年５月１日

工事費：520,500,600 円

■建物工事

設計監理：㈱ＳＡＬＨＡＵＳ

施　工：佐武・菱和経常建設共同企業体

工　期：平成 27 年３月９日～平成 28 年 10 月 31 日

工事費：3,135,691,440 円

①堀村副校長による施設案内

・校舎棟、体育館ともに天井に木材を使っている。木材は真っすぐではなく、少しカーブを描いている。

・校舎の前のアスファルトは広くしてあり、大型車がすれ違えるサイズになっている。そして、緊急車両が来ても旋回して戻れるようにしてある。あとは岩手県の防災（ドクター）ヘリ等の発着場になっている。万が一何かあった場合、ここに人が集まり、車が全部ここに入ってきて旋回していけるようになっている。

・空気循環の話をしたが、向こうの扉に外付けの暖房というか、ダクトを付けて、循環で下から暖気を出していくというような非常用の暖房をつけられるようになっている。

・海が見えるが、ここは一番高いアップロードの校舎なので、津波に対しても安心である。

・校舎の延べ床面積は 7,000 ㎡位ある。岩手県だと高くても校舎は４階。岩手県はエアコンなしの４階とかが多い。

・本校では、駅伝に力を入れている。ジュニアがあるわけではないが、県内でも５本くらいの指に入る。

年間を通して色々な大会がある。
・体育館は広く、天井も高い。災害時にはここが避難所となるが、帰宅できない生徒たちが寝泊まりできるスペースも別にある。
・体育館のステージ裏はガラス張りになっていて、カーテンを開けると明るい。
・体育館の裏、武道場の脇には、災害時用にトイレを設置するマンホールがある。

質疑応答

★こういう状況での統合のためか、子ども達は非常に礼儀正しく、感心した。千代田でも 27、8 年前、小学校 14 校を 8 校に減らしたが、子ども同士も親同士もいろいろとあったようだ。統合後の子ども同士の関係や親同士の関係は変わったのか。**（戸張委員長）**

⇒広田地区、小友地区、米崎地区それぞれに地域の特性がある。小規模な小友、広田は以前高校もあったがいわゆる漁村、米崎はその両方、半農半漁という形だ。それぞれの子たちの特性、3 つの地区のいいところが本校で出てきているのではないかと感じている。海に近いところのスピリッツとか細やかな気持ちのよさとか、それぞれ出ている。

統合して 6 年目になるが、3 つの地区の良さがうまく溶け込んでいるのかなと思う。県内の中でも、子ども達が生き生きと活動している学校ではないかと思う

★事前勉強会の資料に、学校機能の充実に加え、被災した住民の地域の居場所も目指したとあったが、地域の人たちとの関係はどうなっているのか。**（戸張委員長）**

⇒この施設のコンセプトが地域の人たちにも使っていただけるようにということでスタートしたが、以前の旧米崎中学校の時には、校庭に仮設住宅があり、そこに住んでいる人達がそばにいて、地域の方々といろいろな行事の時に結びついていたが、ここに引っ越してきて地域の人たちとの関係が少し薄くなったという本音はある。ただ、各行事の時にチラシをまいたり、運動会や文化祭などたくさん来ていただけるよう努力をしている。

また、長期休みの時には夏も冬も地域ボランティアということで、190 名程度の生徒たち全員が先生方と一緒に保育園、地域コミュニティ、旧仮設校舎の掃除、草刈などを行っている。この前は新しく松の木を植えるのを手伝ったり、広田の大野海岸に震災後初めて海水浴場がオープンしたので、そこのゴミ拾いをするなど、地域との結びつきをなくさないよう努力している。

★プールはないのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒中学校にはない。小学校にはある。

★3 つが統合し、校区がすごく広くなったと思うが、スクールバスは出しているのか**（内田委員）**

⇒広田地区、小友地区の半分がスクールバス。自転車通学は 1 人しかいない。坂がとにかく多い。正直言うと車での送り迎えが多い。

★部活もスクールバスに合わせて終わりなのか。**（小林や委員）**

⇒通年、部活動は 18 時 30 分までに終わる。終わった後、特別にスポーツ少年団に行ったりクラブ活動に行ったりというのはほとんどない。

委員・理事者の意見・感想等

★最適な避難経路の確保をはじめ、有事の際の大型車両の通行や避難所となった場合の避難物資の出し入れ等がしやすいように工夫されていた。**（秋谷委員）**

★被災した 3 つの中学校が統合し、新たに高台に整備された市立中学校である。まずは、大屋根の個性

的な外観が目につく。被災を乗り越え、生徒、教員、住民がワークショップを重ねて建築デザインに反映されたとのこと。グッドデザイン賞も受賞するなど、素晴らしい取組みである。

校庭は広く、教室からも海が見渡せ、室内は地元材がふんだんに使われ、木の温かみ溢れる印象的な仕様となっている。当然であるが、防災対策は色々な工夫がなされていた。校舎前にはヘリが発着可能なスペースが確保され、体育館は災害時には避難所となる。トイレが仮設出来る配慮もされていた。**（内田委員）**

★被災した３つの中学校を統合して昨年１月に竣工した校舎は学校づくりのプロセスで生徒・教員・地域住民とワークショップを開催して建築デザインに反映させ、2017 年度グッドデザイン金賞受賞。地域に開かれた学校として開放感ある諸室配置と大屋根の木の架構が印象的である。**（安田参事）**

堀村副校長（写真左から２番目、手前）に学校内を案内していただいた

１階ホール、天井がとても高い

図書館の床には暖気循環用の通気口がある

普通教室、ここも天井は木材

２階の吹き抜けから１階の普通教室の様子が見える

とても広い体育館。ほとんど木造

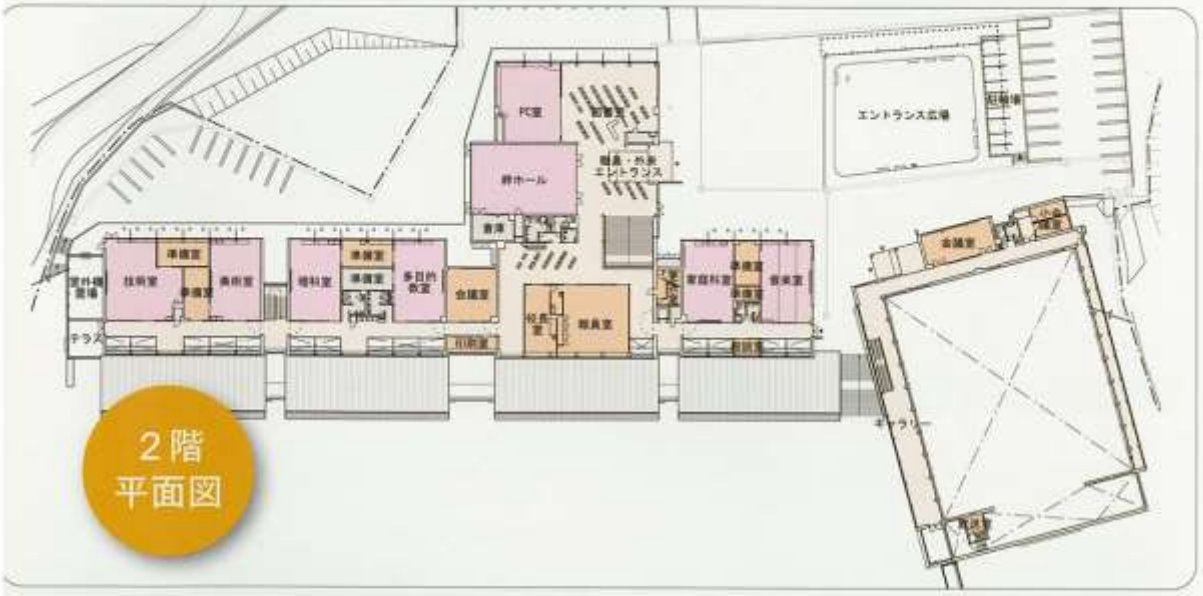
舞台裏には窓があり、とても明るい

マンホールトイレのための穴、
向こうには海も見える

格技室では卓球部が練習中

大階段で記念撮影

1階
平面図
アリーナ
ステージ
武道場
（武道場地下1階）


2階
平面図
エントランス広場
PC室
多目的教室
会議室

施設概要

■敷地
用地面積 34,693㎡
（屋外運動場 10,964㎡　テニスコート 3面）

■建物
・校舎棟
鉄筋コンクリート造　一部木造及び鉄骨造　2階建
延床面積 4,493㎡（1階:1,879㎡　2階:2,614㎡）
・屋内運動場棟（体育館）
鉄筋コンクリート造　一部木造及び鉄骨造　2階建
延床面積 1,995㎡（1階:1,587㎡　2階:408㎡）
・武道場棟
鉄筋コンクリート造　一部鉄骨造　2階建
延床面積 537㎡（1階:193㎡　2階:344㎡）

工事概要

■敷地造成工事
施　工:及常建設・山徳建設経常建設共同企業体
工　期:平成26年3月20日～平成27年5月1日
工事費:520,500,600円

■建物工事
設計監理:㈱SALHAUS
施　工:佐武・菱和経常建設共同企業体
工　期:平成27年3月9日～平成28年10月31日
工事費:3,135,691,440円

陸前高田市立高田東中学校
岩手県陸前高田市米崎町字和方130番地1　TEL 0192-55-2756

（３）大船渡市立越喜来小学校

施設概要

■敷地

用地面積 40,307 ㎡、平場面積 21,725 ㎡

■構造・規模（建物）

・校舎棟

鉄筋コンクリート造＋木造２階建

延床面積 3,582 ㎡

・屋内運動場棟

鉄骨造平屋建

延床面積 1,131 ㎡

・プール附属棟

木造平屋建

延床面積 125 ㎡

■主な設備

排水：合併浄化槽処理

暖房：ＦＦファンヒーター

冷房：電気エアコン（ＰＣ教室、保健室）

照明：ＬＥＤ照明、校庭照明設備

換気：機械換気（24 時間）

その他：エレベーター、太陽光発電、自家発電、雨水利用

工事概要

■敷地造成工事

測量設計：中井測量設計㈱

施　工：㈱ピーエス三菱・中村建設㈱特定共同企業体

工　期：平成 26 年２月 12 日～平成 27 年７月 24 日

工事費：1,025,304,000 円

■建物工事

設計監理：㈱佐藤総合計画東北事務所

施　工：東急建設㈱・正三建設㈱特定共同企業体

工　期：平成 27 年６月 24 日～平成 28 年 10 月６日

工事費：2,507,185,000 円

①鈴木校長より

・現在 22.3℃で東京と 10℃以上違う。涼しくていいのでないか。

・越喜来（おきらい）と読めただろうか。自然に恵まれて海産物もおいしいので、是非「お嫌い」にならないでいただきたい。

・最初に 3/11 からこの校舎に至るまでのスライドを見ていただきたい。

―　大型テレビによるスライド投影　―

・危機管理については、危機管理マニュアルの「21　地震への対応」、「22　津波への対応」等でどのように対応するのか細かく決められており、本校もこれに従って行っている。

・「有事の際の対応について」というものを各家庭へ配っている。津波の時にどうするかということで、1 登校前、2 登下校中、3 在校中、4 下校後と状況に応じた内容となっている。何時までに警報解除だったら給食は出ないが学校はやるとか、スクールバスに乗って通っている最中だったらどこに逃げるなど、細かく決まっている。

・この「有事の際の対応について」の最後に「我が家の避難場所」を書く欄がある。各家庭で避難場所を話し合い、書いてもらい、見えるところに貼るようにしてもらっている。そうすると連絡が取れない時にどこにいけば親に会えるかが分かる。

・「児童家庭調査票」は、どこの学校でも 4 月当初に家庭の様子を知るために書いてもらっていると思うが、この中の「緊急避難場所」欄は必ず書いてもらっている。どこにいけば親子が会えるのか話し合って決めてもらうことを徹底している。

・学校にいるときはもちろん避難訓練などをいっぱいやっているが、災害時に子どもを引き渡す際には必ず誰にいつ引き渡し、どこに避難したかを学校で把握する必要がある。そこで「引き渡し名簿」が付いている。

・各学級に非常時の避難袋があり、担任がそれを持って逃げるのだが、その中に子どもの名簿や引き渡し名簿などが入っている。

・全然関係のない人には引き渡さない。例えば、うちの隣の子だから一緒に連れていくというようなことはさせていない。

・親が迎えに来たから必ず引き渡すのではなく、例えば津波警報が出ている場合には、校長の判断でまだ渡せませんということもあり、保護者には了解をいただいている。子どもは安全に渡すということを徹底している。

・30 年、40 年に 1 回は必ず大きな津波がくるところなので、おじいちゃん、おばあちゃんや親が経験した津波があって、津波の時は高いところに逃げるというのが各家庭において徹底している。地震があったらまず高台に逃げるということが徹底されている地域である。

・それでも今回のように想定外のことが起きてしまった。今回、私も経験してみて、大変な被害にあった。1 週間お風呂に入れないし、歯を磨けないというような状況だった。

・ライフラインとして水、電気、情報があるが、情報は全然入ってこない。東京の親戚が大変だったねと連絡をよこしても、そこにいる本人は電源がないので電話やメールを受けることができず、テレビ、ラジオも付かないので、情報が入ってこない。

・連絡の重要性だが、大船渡市でやっているきずなメールというものがある。これは市が無料で配信しており、市の防災情報が一斉に管理者に流れる仕組みとなっている。

・基本的には小・中学校が対象だが、こども園も加入している。例えば越喜来小学校で災害があって、どこへ避難しているという情報を越喜来小学校の保護者、コミュニティに一斉にメール配信できる。

どこへ迎えに来てくださいとか、台風が近づいているので今日が臨時休校にしますなどの情報を無料で流せる。

・きずなメールは、携帯を持ってないとダメだし、携帯の電源がないと受信できないが、この他に防災無線があって、電柱に設置されたスピーカーから流れる内容と同じ災害情報を受信する装置（電池式）が希望する家庭に配布されている。

・防災行政無線は、市と公的機関、公民館などに設置されていて、バッテリー式で情報のやり取りができる。取り外して携帯することもできる。

・この３つで連絡が取れるようになっているが、携帯電話の電源が切れている場合は各家庭と連絡が取れないので、先ほどの避難場所を決めておくというようなことは絶対に必要と考えている。

・赤いコンセントが体育館や職員室にあるが、これは停電時に太陽光で電源を確保できる設備である。

・防災教育だが、「復興教育（おきらいプラン）」というのがあり、全体計画と年間計画がある。また、教育的価値の一覧表というのもあり、防災教育、心のサポート、地域との交流を中心に主に取り組む具体の項目が明記されている。

・避難訓練はどこの学校でもやっているが、来月９月、越喜来小学校では下校時の避難訓練をやる。子ども達が帰りにどこが危険個所か、ここでもし地震があったらどこに逃げるか、というようなことを確認しながら、先生が付いて行って、ここで地震が起きたという想定でピーッと笛を吹くとブロック塀から離れたり、倒れそうなものから離れて身を低くしたりということをやっている。

・防災教育で目指すところの一つ目は、自分の命は自分で守る術を身につけるということである。ここで言えば地震や火事からとっさに身を守ることである。

・防災教育のもう一つの柱は何が危険なのか判断できる力の育成である。子ども達はずっと越喜来にいる訳ではなく、これから日本各地で生活をすると考えられる。行く先々にはさまざまな危険があり、こうした能力は大事なのではないか。

・この辺の子たちは震災を経験しているので、みんな真剣にやっているが、普通は小１から中３まで９年間避難訓練をやっていると、中３になるとばかばかしくなって、真剣にやらなくなってしまう。しかし、学年が上がってきた子は何が危険かを判断する力を身に付けておけば、大人になってから役立つと思う。

・それから被災地なので、防災教育の３つ目の柱は、津波の経験を語り継ぐということである。

・今年の小１は 2011 年生まれなので、震災の記憶がまったくない。そうすると津波の時に何が必要なのか、何を用意しておけばいいのかということを伝えるのも大事になってくる。全国各地からいろいろな支援を受けてきたことを伝えるのも大事だし、もしどこかで災害がおきたら、自分たちはどうすればいいのかということも語り継ぐ必要がある。

・今年、大阪北部の地震、西日本豪雨があったが、本校の児童会の子たちは募金をして届けている。東日本大震災の時にお世話になったからというのもあるし、災害で困っている人がいるが行くことができないから募金をしましょうということで、そういった心を育てるのも大事かと思う。

・４つ目だが、津波が来るところに住んでいるから嫌になる。来ないところに住みたいと思うが、そう思われては困る。それでも郷土、ふるさとが大事なんだよ、いいところなんだよ、サンマもおいしいし、海もきれい、ご先祖様もずっと住んでいたところなんだよ、ということで郷土を大事にする気持ちを育てたい。日本中どこ行っても災害はある。災害のないところに引っ越し続けるのは難しいと思う。ただ津波が怖いだけではなく、郷土を愛する力が大事なのかと思う。

・「希望の花」集会というのを毎年、3/11 前後にやっている。語り継ぐということで、追悼の意を込め

てやっている集会である。１年を振り返ってということで作文を書かせている。６年生の書いた「あの日を忘れない」という作文があるので後で読んでいいただきたい。

・「防災かるた」という平成 24 年度の卒業生が作った立派なものがある。避難に関することだけでなく、昔あったお祭りの様子などもかるたに入っている。

・避難場所とか避難経路は１つ決めたらそれで終わりではなく、できれば各家庭で複数個所決めておくといい。１か所ダメになったらどこに行けばいいか分からなくなってしまっては困る。

・東日本大震災の時には、教員がまだ学校に残っており、学校が緊急的に避難場所になった際には避難所運営を手伝った教職員もいた。避難所を決めたら終わりではなく、そこの運営を誰がやるのか、どんな人が来るのかというところまで考えておきたい。

・例えば、千代田区だと昼と夜の人口が違うと思う。夜だったらどのくらい、昼だったらどのくらいの人が来るのか、区役所の職員が運営に行けばいいじゃないか、でも家は埼玉県や千葉県にあるので来られない、では誰が運営するんだ、学校が避難場所なんだから学校の先生がやればいいじゃないか、学校の先生も近くに住んでおらず電車も動かない、ということも考えられるので、そこの運営を誰がやるのかということは重要になってくる。

・他の地域との連携を是非考えていただきたい。避難場所を決めた、避難してきた。で、何日間か運営していると大量のがれきが出た。今度の西日本豪雨でも大量のがれきをどうするんだという話になったが、まさか皇居を仮置き場にするわけにはいかない。処理するのにどこかの地域と協定なりを結んでおいて、そっちに運ぶというのも必要になると思う。大船渡では他県に持って行って処理してもらったものもあるので、そういった地域とのつながりも持っておかないと、大変だと思う。

・例えば水１つとっても、例えば大きな地震で水道管が破裂した。復旧したが、今度は葛飾にある浄水場が塩水をかぶっていて復旧しないという時に水をどこから持ってくるか。大船渡は京都から、いや日本中から給水車が来てくれたが、そういうのを決めておかないといけないと思う。

・ここはプロパンガスなので、ガスはあるが、都市ガスの場合、配管がダメになってしまうとしばらくは燃料にも困る。

・お年寄りが１人で暮らしている世帯がどのくらいあるのか、身体障害者を含めて体が不自由な方が何人いるのかなどを把握して、誰が助けに行くのかというところまで想定しておくのが大事だ。こちらと違い千代田区は人口規模も違う。津波は来ないが火災とか起きたり、建物が崩れたりすることが考えられる。子ども達の命を守るためにも、そういったところまで想定しておく必要があると思う。

②伊藤住宅公園課技監より

・東日本大震災を踏まえた地域の防災拠点としての機能ということで、いろいろと機能強化を図っている。１つは避難所になることを前提として、避難所となる体育館と校舎を明確に分けようということである。

・救援物資等が受け入れやすい場所ということで、体育館が道路側にある。一般の駐車場と教職員の駐車場が体育館の両側にあり、避難者は一般の駐車場から直接体育館に入れるようになっている。救援物資等については、反対に職員駐車場から入れるようになっている。

・プール側の駐車場に面して家庭科室を配置して、ここで炊き出しをしたらそのまま避難所へ持ち運べるようになっている。

・このように、避難所機能を道路側に面した体育館に集約し、学校棟と完全に分離するようにした。

・車で避難する人もいるので、グラウンドには広場からも入れるし、職員駐車場からも校舎からも入れ

る。全体が避難できるような計画、配置となっている。

・インフラの関係だが、いくつかある赤いコンセントは太陽光発電から取っており、そのほかに自家発電もある。太陽光のバッテリーがなくなっても、自動的に切り替わって自家発電から電気を供給できる。

・インフラについては、基本的に3日間、自立できるようにという容量を考えている。3日過ぎれば自衛隊なりの支援が入る。自家発電の油も3日程度持っている

・トイレは雨水を貯めてトイレ水として使っている。震災当時、一番困ったのはトイレ用水で、水道水を使っていると水がなくなったときに欠水してしまう。飲み水とトイレ用水は大量に供給する必要があるので、トイレだけに使うのはなかなか難しい。そこで雨水で貯めることによって、3日間程度のトレイ用水は確保できる。また、ここは公共下水ではなく浄化槽で、浄化槽の電源は自家発電から取れる。したがって3日間は十分、トイレが使える。

・受水槽を大きくしてある。トイレ用水には飲み水の水槽は使わないので、量的にはそんなに使わない。

・インフラとして、電気と水道はこういう形で確保しており、情報については無線で役所とやり取りをする。

・震災当時は、世の中どうなっているのか市役所の職員も分からないような状況だったが、太陽光発電や自家発電の電気があるのでテレビも見られる。この施設の防災拠点としての大きな機能である。

・生徒が避難すると、保護者が迎えに来ても渡さないこともあるということなので、校舎の一部のエリアを区切って、電気、水道が確保できる状態になっている。子ども達が避難して学校にいる、体育館にも避難者が来て避難するということが両立できるような施設にしてある。

質疑応答

★子ども達はスクールバスでここに来るのか。その比率はどのくらいか。**（小林や委員）**

⇒歩き、スクールバスの子がおり、スクールバスを使わない子が78人中20数人で、あとはスクールバスである。

★歩きの子はまだ分かるが、スクールバスの子は急に津波が来た場合、どうやって避難するのか。実際にいる場所と訓練する場所が違う場合、特に低学年の子はどうするのか。**（小林や委員）**

⇒まずは、バスに乗っている最中、地震や災害があった場合には、スクールバスには市の防災無線が一緒に入っているので、運転手さんが近くの安全な場所に止める。例えば道路の途中、ここだったらこの高台にとか、浸水地は通らないが、万が一を考えて安全なところに止めてもらう。

　それから下校時避難訓練の場合には、スクールバスを降りてから、自分たちの住む地域で危険な場所を確認して、それからそういう時はここに逃げるというのを訓練する。

★いろいろなパターンを考えなければいけない。**（小林や委員）**

⇒そのとおり。少なくとも通学路と学校にいる時は、自分の身を守れるようにしなければならない。

★震災前の防災教育はどうだったのか。**（牛尾委員）**

⇒私自身は、震災当時、越喜来小学校にいなかったが、避難訓練自体はどこの学校でもやっていた。津波を想定してやっていたが、マンネリ化していたという印象はある。年間行事の1つとして避難訓練やるので机の下に隠れよう、校庭に逃げようという感じだった。その後、登下校時の避難訓練も必要だ、抜き打ちも必要だ、教室じゃない場所にいたときの避難訓練も必要だということで、いろいろなシチュエーションで避難訓練をやるようになったのではないかと思う。

★すぐに逃げるという意識を植え付ける狙いなどはあったのか。**（牛尾委員）**

⇒越喜来小学校だけではないが、避難訓練の時には、校庭にみんなで集合して避難場所はここと教えてはいる。私は震災の時、大船渡小学校にいたが、避難場所だった。５時間目の後の大掃除位の時だったので、子ども達はバラバラだった。すごく揺れが大きかったのだが、子ども達は地震の最中は身を守って、その後は各自で校庭に出てきて、先生方もいたが、すぐ整列して、ここは避難場所だからということで校庭にいた。海のすぐ近くだったのだが、ここは以前のチリ地震の津波も来なかったからといって校庭にいたのだが、海側からジョーズの背びれのように屋根がずんずん近づいてくるのが見え、まずいということで、もっと高いところに避難する判断をした。

いろいろな学校でここは危険だからさらに高いところに避難するという判断をその当時の先生たちがした。子ども達は避難訓練のとおりにまず校庭に集合し、それから先生の指示で避難した。

越喜来小学校は避難階段ができる前はまず校庭に集合して、それから避難することになっていた。避難階段ができてからは、その先に県道があるので、まず県道に避難して、それから避難するように変わった。実際に避難したときは、避難場所は三陸鉄道の三陸駅だったのだが、津波が押し寄せてくるので、学校の判断でさらに上に避難し、被害はなかった。

市内の学校で亡くなった児童が１人だけいるが、歯医者に通院する関係で、母親が迎えに来て、病院に行く途中に車で被災したようだ。保護者が迎えに来ても帰さないというように変わってきているのは、そういった経験もあるからだろうと思う。

避難も校庭に集まってからではなく、というように変わってきた学校も何校かある。

★２つある。１つ目はこの建物はＲＣと木造の合体だということだが、この木をふんだんにつかった仕様というのは大船渡市や教育委員会が提案したのか、それとも設計事務所が提案したのか。２つ目はこの窓や構造体に使われている木だが、地元の木を使っているのか、であればその木は何か

（内田委員）

⇒一部木造だが、国の方針で、公共施設はできるだけ木で作るようにとのことである。材料については、カラマツの研鑽材がほとんどである。

★児童家庭調査票はどう管理しているのか。**（小林た委員）**

⇒４月に毎年書いてもらっている。学校によっては奇数学年だけは毎年書く、変更があった場合には加筆するところもある。

管理だが、ファイルに綴じて職員室に保管している。子ども達の家庭環境などが分かったり、保護者の勤め先なども分かるような個人情報なので、職員室で管理している。それから自分の受け持ちの子であれば、教員が電子データにしているところもあるが、その辺も漏れないようにはしている。

保護者が大船渡の市街地などに仕事で行っている場合、通常だったら浸水域を通らずに迎えに来られるのだが、東日本大震災の時は道路が寸断されていて迎えにくるのが大変な保護者もいた。それこそ山道を歩いて迎えに来た人もいた。うちのお父さん、お母さんが迎えに来ないということで不安になってしまった子もいた。

★今の話に近いが、年間計画に各学年、祖父母交流会というのがあるが、お父さんお母さんたちがお勤めで車を使ったりしていると思うが、各家庭で祖父母がいる家庭はどのくらいあるのか。**（池田委員）**

⇒ここは３世代で暮らしているところは結構ある。半分以上だと思う。保護者は普通の参観日に学校に来るが、祖父母は年に１回、祖父母交流会に来る。

★防災計画の中で先ほど話があったように経験を語り継ぐ、自分たちの心を育ててしっかり避難する、津波に備えるというところ大変共感をしているが、一方で大変な映像を見させていただき、目の前で起きた出来事に対してショックを受けている子どももいると思うが、心のケアはどうやっているのか

（池田委員）

⇒岩手県全体で「心と体の健康観察」というのを年１回、震災の翌年からずっとやっている。そうすると見守りが必要な子が全部分かる。

巡回型のスクールカウンセラーがおり、市内の小学校と中学校を回っている。中学校は学校によってはずっといる。担任がこの子ちょっと、という時にはカウンセラーに相談したり、あるいは親が相談するケースもある。兵庫県の阪神大震災の経験から、岩手県でも心のケアはずっとやっている。

③鈴木校長、伊藤技監による施設案内

・去年作った防災マップ、自分たちの住んでいる地域の危険な場所を地図に落としてある。スクールバスで通う子もいるため、距離があり１枚にできないので、何枚かに分かれている。竹が倒れそうとか、ここが工事中とか、子どもの視点でいろいろと書いてある。これが去年版で、９月に更新されることになる。

・防災行政無線、これが携帯になる。トランシーバーと同じで押して喋るパターン。バッテリーで携帯することもできる。

・赤いコンセントが太陽光発電を使っているので、この職員室では、電話や防災行政無線ができる。

・避難場所になるということで、多目的トイレがある。バーが付いていて、車いすで入れる。

・教室にも外に出られる扉がある。このように外に出られる箇所がいっぱいある。

・廊下の幅が結構広く、スペースが多い。

・点字ブロックが校舎内にある。避難を想定しているので、目の不自由な人向けということだ。現在、目の不自由な子は通常学級にいないが、仮に目の不自由な子が入っても大丈夫なようになっている。

・理科室とか特別教室がみんな校庭の反対側、体育館側にある。

・天井は高くて掃除が大変。

・総工費は約 25 億円で、災害復旧と復興交付金が入っている。通常よりは割合が良かったので、立派になったかなと思う。

・ここから海が見える。夏場は海から風が吹くと大変涼しい。

・すごくスペース的には広いので、例えば体育館に避難者がいても、こういったスペースや空いている小さい教室などが使える。

・今の建物なので、エレベータもある。

・２階が木造になったため、階段が２か所必要になった。消防法、避難経路の関係で２方向避難が必要。木造でなければ１か所で済んだので、ちょっと無駄ではある。階段が多い方がアクセスがよいかもしれないが、学校としては子どもがいるので少ない方が良い。

・記念スペース。３つの学校が１つになったので、各校の記念品などが展示されている。

・ここで学校舎と体育館を分けている。

・自家発電の欠点は、土日でも停電になると動き出すこと。落雷で地域が停電になると自動的に起動する。誰もいないときに自家発電が動いてしまう。ただ、手動は大変だし、土日に先生がいないときに、津波警報が出て、その時に学校に誰かがいないと装置が動かせないというのでは、避難所として機能できないことになってしまうので、仕方ないと思う。

・地区の会長などに体育館の鍵は預けている。

・78 人の子どもにはちょっと広すぎる学校かもしれない。

質疑応答

★普段は施錠してないのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒施錠はしてあるが、本当にあちこち開けることができるし、校庭に出ることもできる。

★外から入ることはできないのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒防犯上の関係もあって、不審者対策という意味で外からは入れないようにしてある。

★オープン教室にはなっていないのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒そのとおり。学校の先生が嫌がる。設計屋さんとかに大学の先生などが入るとやりたがるが、実際に学校の先生は嫌がる。

★ランニングコストは以前に比べて上がっているのか。**（事務局）**

⇒そんなに変わらない。暖房性能が良くなっていたり、電気がＬＥＤになっていたり、太陽光を使っているのとかで、必ずしも高いという訳ではない。

★その辺（ランニング）は単費で補助金はでないのか。**（事務局）**

⇒そのとおり。

★やませはあるのか。**（小林や委員）**

⇒もちろんある。海が近いのでガスがかかりやすい。夏入る前、梅雨あたりは涼しい。

★マンホールトイレはないようだが、雨水を貯めて賄える計算だからということか。**（事務局）**

⇒そのとおり。実際震災の時の話を聞いたが、臭いの問題があって、結構使われなかったみたいだ。

★この辺は剣舞が伝統芸能となっているのか。**（事務局）**

⇒獅子舞、剣舞（岩手・宮城両県に分布する民俗芸能は「けんばい」と読む）などの郷土芸能を本当はやらなければいけない。地域の少子高齢化が進み、お祭りか何かで披露したいが、まだ地域が復活していないので、５年に１回のお祭りがずっとやられていない。そうすると伝統芸能を継承するのも途絶えてくる。教える方が高齢化する。今、小学校の運動会でやっているが、なかなか子ども達が少ないので大変。ここは３つの地区の子どもが集まっているが、それぞれ郷土芸能が違っている。

★地域の方へ開放はしているのか。**（事務局）**

⇒施設開放とかで体育館は開放している。家庭科室も特別な要請があればやる。

委員・理事者の意見・感想等

★復興教育（おきらいプラン）全体計画、年間計画及び教育的価値一覧表に基づき、「自然災害について、発生のメカニズムや歴史と対策を理解させる」「災害発生時に身を守る方法や応急処理、サバイバル技能を身につけさせる」「命を尊重する心、他者を思いやる心を育てる」「郷土を愛し、その復興・発展について主体的に考える人材を育てる」を復興（防災）教育目標としている。具体的には、下校時に行う実践的な津波避難訓練、津波学習、防災マップ作成、郷土芸能の体験・引継ぎなどを行っている。**（戸張委員長）**

★敷地面積４万３百７㎡、鉄筋コンクリート造り・木造２階建て 5,000 ㎡弱の校舎に排水は、合弁浄化槽処理、暖房は FF ファンヒーター、冷房は電気エアコン、LED 照明、24 時間機械喚起設備、太陽光発電・自家発電装置、雨水利用と復興小学校として最先端の設備が整っている。

　また、避難所としての機能は学ぶべきところはとても多く参考になった。ちなみに、オープン教室とはなっていなかった。避難所となる体育館には、支援物資が駐車場から直接運び込めるよう開口が設けられていて、学校経営が行われていても避難所運営が可能となっている。食事の提供をしやすいよう調理可能な家庭科室を体育館側に設置し、調理のためのガスコンロが整備されている。プロパン

ガスを使用しているのでガスでの調理が可能だということである。本区と比較しても参考になると思う。

また、震災時の経験から避難所となる体育館に普段使うことのない床暖房が整備されている。そして、停電時に利用できるよう太陽光発電から直接引いてあるコンセントの整備がされている。見習うべきアイデアが多くみられた。年に数回避難所を開設するとの話なので、しっかり対応ができているのだと思う。避難訓練は年４回地震・火災・。津波などを想定して行われているようで、防災意識の高さも感じられた。**（たかざわ副委員長）**

★大震災から７年半が経過していて、小学生の中には震災を知らない子ども達がいる。家族や先輩の方々が幾多の困難を克服されて今日ここ至ったことを聞きながら育ったと思う。越喜来小学校に訪れたとき児童達が明るく元気で礼儀正しく対応してくれたことに感激をした。越喜来小学校は児童数が83 人だが児童が少ないとは思えない雰囲気だった。**（小林た委員）**

★越喜来・崎浜・甫峯の３つの小学校を統合して高台に新築された校舎は１階と２階外壁はＲＣ造による耐震耐久性の向上と屋根及び内部は木を有効活用したぬくもりのある学校建築が印象的であった。体育館は地域住民が安全に避難できるよう、外部からの動線も工夫され、災害時の非常用電源として太陽光発電と蓄電池を設置している。また、冬期の避難でも活用できるよう床暖房の機能も導入した工夫等、参考になった。**（安田参事）**

説明会場の多目的ホール

鈴木校長によるスライドを使った説明

子ども達が作った防災マップ

職員室の防災無線と防災行政無線
赤いコンセントは太陽光発電が電源

廊下も広く、多目的な活用ができる

天井には木材を使用、とても高い

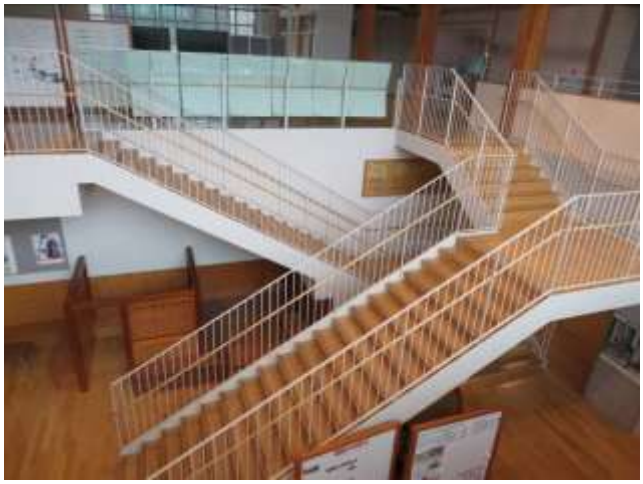
記念ホール、学校の歴史などが掲示されている

写真中央、左から４人目が伊藤住宅公園課技監
校舎模型の説明を受ける

体育館、とても広く天井も高い

体育館、災害時には避難場所となるため、
いろいろな工夫が凝らされている

体育館内にある赤いコンセント
太陽光発電で電源が取れる



階段は２方向避難のため２か所ある。

玄関の前で記念撮影

〔防災教育〕

2　復興教育（おきらいプラン）全体計画

児童の実態

・東日本大震災において保護者1名死亡。
・アンケートから、例年数名の要支援児童が見られる。
・言われたことに素直に従う素直な子どもが多い。
・自ら主体的に考え,判断・行動する力が弱い子どもが見られる。
・地域の復興を願っている子が多い反面、どのように地域と関わっていけばよいのかが分からない児童も多い。

学校教育目標

かしこく
やさしく
たくましく

めざす子ども像

1　自然災害のメカニズムや歴史について正しく理解している子ども
2　状況に応じて、主体的に判断し、自分の命を守ることができる子ども
3　自他の命を尊重し、ボランティア精神を身につけた子ども
4　郷土を愛し、その復興・発展について主体的に考える子ども

復興（防災）教育目標

1　自然災害について、発生のメカニズムや歴史と対策を理解させる
2　災害発生時に身を守る方法や応急処理、サバイバル技能を身につけさせる
3　命を尊重する心、他者を思いやる心を育てる
4　郷土を愛し、その復興・発展について主体的に考える人材を育てる

地域の特性

・東日本大震災において地域の主要産業である漁業,商店施設や海沿いの平地にあった住宅は壊滅的な被害を受けた。
・復興が進み、住宅や道路の再建がほぼ終わり、新たな町づくりが進んでいる。
・漁業施設の再建、商店街の建設等,産業の復興も進められている。

復興教育推進の視点

いわての復興教育	
ひとづくり	【目的・目標】郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する
【いきる】生命や心について	【教育的価値】震災津波の経験を踏まえた生命の大切さ心のあり方・心身の健康
【かかわる】人や地域について	【教育的価値】震災津波の経験を踏まえた人の絆の大切さ・地域作り・社会参画
【そなえる】防災や安全について	【教育的価値】震災津波の経験を踏まえた自然災害の理解・防災や安全

復興教育（おきらいプラン）
【ひとづくり】 ◇状況に応じて、自分の命を守るために適切に行動できる思考力、判断力、行動力を身につける ◇全国から受けた支援に感謝する心、自分も人のためにできることをやろうとする心を育てる ◇震災を学び、他の地域や未来に語り継ぐ
【心のサポート】 ◇自分自身の心の健康を維持できるよう対処法を学んだり、価値ある自分を認識したりして、自分を大切にする気持ちをもつ。
【地域との交流】 ◇お互いに支え合う仲間の大切さ、家族や地域の方々の有難さを感じながら、自らできることや地域づくりへの気持ちをもつ。
【防災教育】 ◇災害についての理解を深めながら、防災・減災の理解をするとともに、日頃の備えや災害時に身を守り生き抜く技能を身につける。

H30 復興教育（おきらいプラン）年間計画

（29年度はB、30年度はAを実施）

月	防災関連行事他		1年	2年	3年	4年	5年	6年
4	登校指導 交通安全教室 地震避難訓練	防災	地震避難の仕方（行1）		地震避難の仕方（行1）		地震避難の仕方（行1）	
		その他						
5	地区連絡網作成 運動会	防災						
		その他				郷土芸能の体験（運動会練習）（総合10）		
6	プール清掃 修学旅行 宿泊体験学習		朝学習で復興副読本		朝学習で復興副読本		朝学習で復興副読本	
		防災	こころのサポート授業（指導案集から）自己紹介をしよう（生1）	こころのサポート授業（指導案集から）あたたかい言葉、君はかけられるかな（生1）	こころのサポート授業（指導案集から）めざせ！聴き上手（総1）	こころのサポート授業（指導案集から）自分の気持ちを伝えるには（総1）	こころのサポート授業（指導案集から）あるある、イライラ！（総1）	こころのサポート授業（指導案集から）困難な状況にぶつかっても（総1）
		その他						
7	PTA・教職員 救命救急法訓練	防災	安全に通学しよう（DVD）（生1）		急な大雨・雷・竜巻から身を守ろう（DVD18分）（総1）	安全な川遊びのために（DVD14分）（総1）	急な大雨・雷・竜巻から身を守ろう（DVD18分）（理1）	離岸流ってなあに（DVD8分）（理1）
		その他						
8	登校指導 校内水泳記録会	その他	川の楽校（生3）		川の楽校（総2・理1）			
9	下校時避難訓練 祖父母交流会 市内陸上記録会	防災	下校時津波避難（学1・生1） 心とからだの健康観察（学1）		下校時津波避難（学1・総1） 心とからだの健康観察（学1）		下校時津波避難（学1・総1） 心とからだの健康観察（学1） 自分の身を守る（総1） Aくらしの中の身近な製品事故（DVD26… B情報リテラシーを学ぶ	
		その他	祖父母交流会（教科2）		祖父母交流会（教科2）		祖父母交流会（教科2）	
10	学習発表会 遠足	防災						防災マップのまとめ（総1）
		その他						
11	火事避難訓練 市内音楽会 校内マラソン大会	防災	火事避難訓練（学）		火事避難訓練（学） 消防団の仕事を知ろう（総2） A消防団とは、日常活動、心構えなど B消防団とは、東日本大震災時の活動など		火事避難訓練（学） 避難所の食事作り体験（家2）	火事避難訓練（学） 防災品で火事を防ぐ（家1）
		その他	児童会フェスティバルに参加しよう（児1）			児童会フェスティバルを企画・運営しよう（児1）		
12			朝学習で復興副読本		朝学習で復興副読本		朝学習で復興副読本	
		防災			災害時に必要な物を考えよう（総2）副読本64	正確な情報の収集・判断・緊急地震速報（総2）副読本53、54	防災に強い町作りを考えよう（総4）	語りつぐ（防災新聞作り）（総4）
		その他	ボランティア活動（共同募金取り組み）			ボランティア活動（共同募金取り組み）		
1	登校指導							
		その他			郷土芸能引き継ぎ週間（体3）			郷土芸能引き継ぎ週間（体3）
2	なわとび集会 入学説明会 6年生を送る会	防災	津波学習（生1） つなみじしん火事おやじ（DVD13分）	津波学習（生1） 大型紙芝居「あっちゃんのランドセル」	津波学習（総1） 大型紙芝居「つなみがきたらすぐ高台へ」	津波学習（総1） 災害から命を守るために（PP）	津波学習（総1） 津波からにげる（DVD17分）	津波学習（総1） 津波に備える（DVD18分）
		その他	1年間を振り返って（国2） なわとび集会（体） 6年生を送る会（児）		1年間を振り返って（国2） なわとび集会（体） 6年生を送る会（児）		1年間を振り返って（国2） なわとび集会（体） 6年生を送る会（児）	
3	希望の花集会 修了式 卒業式	防災	朝学習で復興副読本 希望の花集会（行1）		朝学習で復興副読本 希望の花集会（行1）		朝学習で復興副読本 希望の花集会（行1）	
防災の時数			行事2　生活4 学活3	行事2　生活4 学活3	行事2　総合8 学活3	行事2　総合8 学活3	行事2　総合8 学活3　家庭2 理科1	行事2　総合9 学活3　家庭1 理科1

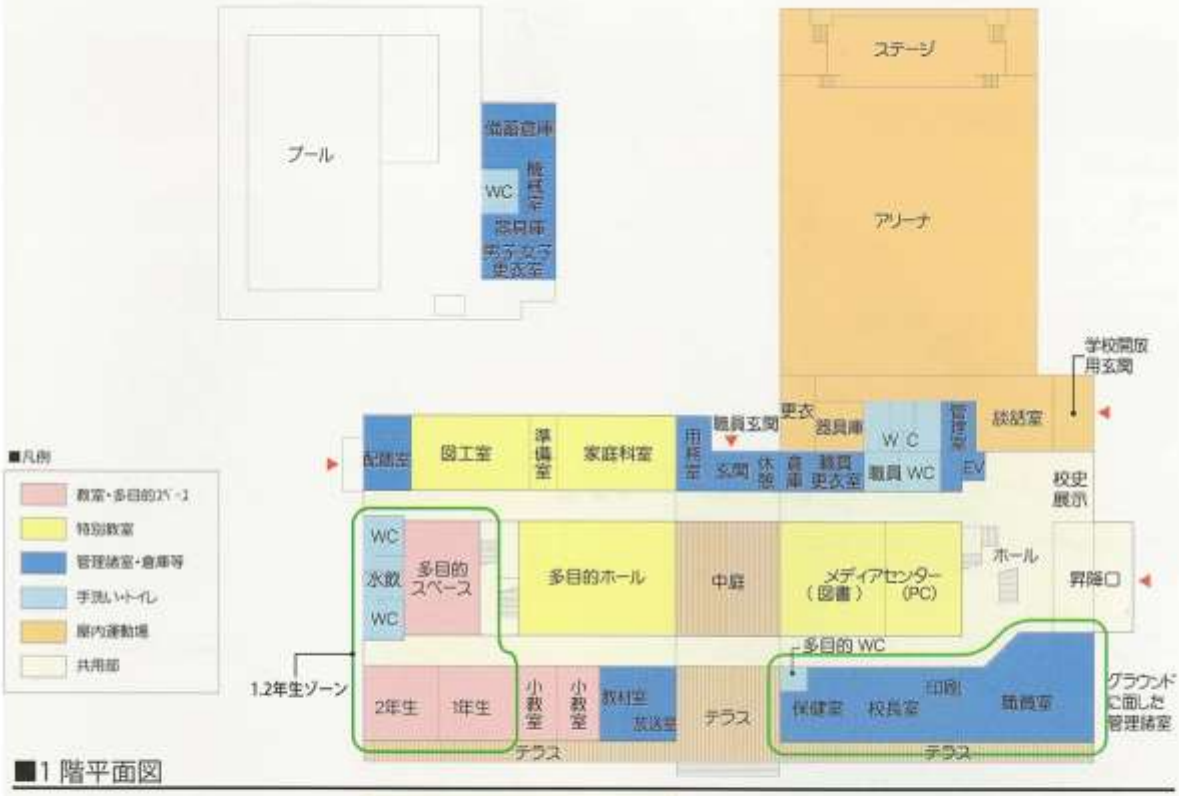
この他　・お礼の手紙を書こう（国語2＝学年ごとに分担、時期未定）
・道徳　（生命尊重・勤労、社会奉仕・不撓不屈・郷土愛など）
・各教科の中で復興教育と関連付けて取り組めるもの（社会や理科や国語など）

H30 復興教育(おきらいプラン)教育的価値一覧表

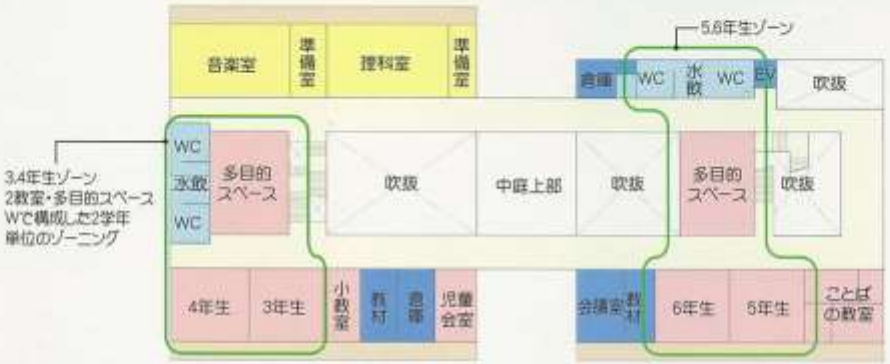
◎ 防災教育・心のサポート・地域との交流を中心に(色のついた所が主に取り組む具体の項目)

3つの教育的価値			具体の21項目	本校の具体的内容
1【いきる】	心のサポート	震災津波の経験を踏まえた 生命の大切さ 心のあり方 心身の健康	①かけがえのない生命	・道徳(生命尊重)
			②自然との共生	
			③価値ある自分	
			④夢や希望の大切さ	・夢先生 (5年 学活1)
			⑤やり抜く強さ	・消防団の仕事を知ろう(11月ー3・4年 総2) ・道徳(勤労・社会奉仕、不撓不屈)
			⑥心の健康	・こころのサポート授業(指導案集から)(6月全校-生1と3年以上は総合1) ・心とからだの健康観察(9月全校 学1) ・お話タイムや相談タイム(随時) ・保健の学習(5年 体育5)
			⑦体の健康	・体育の授業(全校) ・業間運動 ・なわとび集会(2月 体1)
2【かかわる】	地域との交流	震災津波の経験を踏まえた 人の絆の大切さ 地域づくり 社会参画	⑧家族のきずな	・祖父母交流会(9月ー全校 教科2)
			⑨仲間や地域の人々とのつながり	・児童会フェスティバル(11月ー全校 児行1)
			⑩県内外や海外の人々とのつながり	・支援へのお礼の手紙(学年ごとに分担ー時期未定 国語2)
			⑪ボランティア	・赤い羽根共同募金・書き損じはがき集め・ベルマーク収集 ・収穫物をお世話のなっている方々へ配布
			⑫自分と地域社会	
			⑬地域づくり	・郷土芸能の体験(5月ー4～6年 総10) ・郷土芸能引き継ぎ(3・6年体3) ・越喜来の自然(川や山の恵み・海の恵み)総合ー3・6年 ・川の楽校(8月ー1～3年 低学年は生3、3年生は総2・理1) ・越喜来のいいところ自慢(3年ー総合) ・道徳(郷土愛)
			⑭復旧・復興へのあゆみ	
3【そなえる】	防災教育	震災津波の経験を踏まえた 自然災害の理解 防災や安全	⑮東日本大震災津波の様子と被害の状況	
			⑯自然災害発生のメカニズム	・津波学習 (2月全校ー1・2年は生1と3～6年は総1) つなみじしん火事おやじ 津波大型紙芝居 津波からにげる 津波に備える
			⑰自然災害の歴史	・災害に強い町作りを考えよう(12月ー5年 総4) ・防災新聞作り(12月ー6年 総4) ・希望の花集会(3月ー全校 行1)
			⑱自然災害のライフラインへの影響	・災害時に必要な物を考えよう(12月ー3年 総2)
			⑲災害時における情報の収集・活用・伝達	・正確な情報の収集・判断、緊急地震速報について(12月ー4年 総2)
			⑳学校・家庭・地域での日頃の備え	・避難訓練ー全校(4月行1)(9月学活1)(11月学活1) ・下校時津波避難訓練(9月総1) ・5年防災マップを作ろう(10月総1) ・災害時に必要な物を考えよう(12月ー3年 総2)
			㉑身を守り、生き抜くための技能	・急な大雨・雷・竜巻から身を守ろう(7月 3年は総1 5年は理1) ・離岸流ってなあに(7月 6年 理1) ・安全な川遊びのために (7月 4年総1) ・くらしの中の身近な製品事故 (9月 5・6年 総1) ・避難所の食事作り(11月 5年 家庭科2) ・安全に通学しよう(7月 1・2年 生1)

※学期に1回ずつ、朝学習で県の復興副読本で「いきる」に関わるところを話し合う機会を作る。



■1 階平面図



■2 階平面図

越喜来小学校移転改築事業

本事業は、東日本大震災により被災した校舎、屋内運動場等の移転改築であり、災害復旧事業及び東日本大震災復興交付金事業を導入し、安全な高台への教育環境の整備、さらには地域の防災拠点として整備を図りました。

主な経過

平成 23 年 3 月 11 日	東日本大震災津波で越喜来小学校全壊
平成 23 年 9 月	第 1 回越喜来小学校・同こども園建設委員会開催（計 15 回開催）
平成 24 年 2 月	建設委員会からの答申をふまえ移転場所を決定
平成 24 年 4 月	越喜来小学校、崎浜小学校、甫嶺小学校の 3 校統合
平成 25 年 1 月	基本設計及び実施設計完了
平成 25 年 8 月	用地取得完了
平成 25 年 12 月	埋蔵文化財発掘調査現地調査完了
平成 26 年 2 月	敷地造成工事着工
平成 27 年 6 月	建物工事着工
平成 27 年 7 月	敷地造成工事完成
平成 28 年 10 月	建物工事完成
平成 28 年 11 月	開校

越喜来小学校 住所：大船渡市三陸町越喜来字小出24番地4 TEL：0192-44-2102

施設概要

■敷地
用地面積：40,307㎡
平場面積：21,725㎡

■構造（建物）
校舎棟：鉄筋コンクリート造＋木造2階建
屋内運動場棟：鉄骨造平屋建
プール附属棟：木造平屋建

■規模（建物）
校舎棟：3,582㎡
屋内運動場棟：1,131㎡
プール附属棟：125㎡

■主な設備
排水：合併浄化槽処理
暖房：ＦＦファンヒーター
冷房：電気エアコン（ＰＣ教室、保健室）
照明：ＬＥＤ照明、校庭照明設備
換気：機械換気（24時間）
その他：エレベーター、太陽光発電、
自家発電、雨水利用

■敷地造成工事
測量設計：中井測量設計㈱
施工：㈱ﾋﾞｰｴｽ三菱・中村建設㈱特定共同企業体
工期：平成26年2月12日～平成27年7月24日
工事費：1,025,304,000円

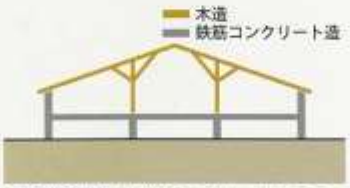
■建物工事
設計監理：㈱佐藤総合計画東北事務所
施工：東急建設㈱・正三建設㈱特定共同企業体
工期：平成27年6月24日～平成28年10月6日
工事費：2,507,185,000円

■配置図

地球環境に優しく、災害に強い越喜来小学校を実現するための取組みを紹介します。

太陽光発電と蓄電池を設置し、照明や災害時の非常用電源として利用します。

災害時の避難所として活用するため、更衣室に4台のＦＦヒーターを設置し、更衣室を暖め、その暖気をアリーナ床下に送風して床冷えを防止します。



1階及び2階外部壁の鉄筋コンクリート造による耐震耐久性の向上と、屋根及び内部の木造化により、軽快でぬくもりのある計画としました。

屋根に降った雨水を回収して、トイレ洗浄水や屋外散水に再利用します。

高天井のメディアセンター、多目的ホールの上部にたまった暖気をダクトで回収して、床下に循環させて暖房効率を高めます。

※越喜来小学校へ向かう前、三陸鉄道南リアス線三陸駅に立ち寄った。

旧越喜来小学校では、大震災の前年 12 月に津波から逃れる時間を短縮する非常通路をつくっており、児童 71 人はこの通路を通って避難し、助かった。海岸から約 200m 内陸にある旧越喜来小学校の校舎の道路側は高さ 5 m ほどの崖で、従来はいったん 1 階から校舎外に出て約 70m の坂を上って崖の上に行き、さらに高台の三陸駅に向かうことになっていた。400 万円をかけて完成した校舎 2 階と崖の上の道路を直接つなぐ津波避難用の非常通路は、「校舎内の児童がいったん 1 階に降りていたら時間もかかるし低い場所を通るので危ない。 2 階から直接道路に出られるようにすべきだ」と考えた故・平田市議の提案だった。なお、平田市議は震災の 9 日前に病気で亡くなっている。

三陸駅の標高は約 24mだが、正直なところ、それほど高くは感じなかった。ただ、ここからさらに高台に向かう山道があり、児童と先生たちはそこを通って 2 次避難をしたということであった。

三陸駅ホームからの眺め

児童たちは駅下の通路を通り、
さらに高台をめざした

※越喜来小学校の調査後、近隣の食堂で昼食を採ったが、少し時間ができたため、鈴木校長の勧める「ど根性ポプラ」を見学した。高さ約 25mのこの木は、昭和三陸地震、チリ地震、東日本大震災と 3 度の地震の津波に耐えたという。木の周囲には広場を整備中で、すぐ近くには防潮堤があり、登ると越喜来湾が一望できた。

ど根性ポプラの前で記念撮影

防潮堤の上で記念撮影

防潮堤の上から越喜来湾
が一望できた

（４）岩手県立大槌高等学校

学校概要（平成 30 年度学校要覧より）

■沿革

大正　８年　５月 18 日　町立大槌女子職業補習学校発足
昭和 23 年 11 月 30 日　岩手県立大槌高等学校と改称
昭和 56 年　２月 20 日　現校舎に移転
平成 23 年　３月 11 日　東日本大震災における避難所運営（～８月７日）
平成 23 年　４月 26 日　大槌中学校３年生が本校校舎を使用（～９月 19 日）
平成 24 年　８月　６日　大阪府立桜塚高等学校と『さくら協定』締結
平成 30 年　５月 15 日　大槌町と『震災伝承活動の連携協力協定』締結

■在籍生徒数

190 人（１学年 53 人、２学年 67 人、３学年 70 人）

■教職員数

31 人

■教育目標

真理・礼節・健康

①菊池副校長より

・本校は高台にあり、後ろの方は山である。震災当時は校舎から海が見えない状態だった。
・来年で創立 100 周年となる。校訓は真理・礼節・健康。在校生が減ってきていて、去年が 220 名、今年は 190 名である。クラス数も３年は３クラスあったのだが、来年すべての学年で２クラスになる。
・被災地ということで、夏休み中、交流に訪れる高校も多い。一番遠くだと岡山から来ていた。東京からも複数校来ている。
・ここに来るときに見えた大槌学園は、元は本校のグラウンドで、震災後に町で平地にするので土地を交換してほしいということで交換し、大槌町の方で小中一貫校を作った。
・このグラウンドの山のぎりぎりのところまで波が来た。近くに農協があるのだが、そこまで波が来たということだ。
・私も若いとき大槌に住んでおり、津波で民宿の屋根に漁船がぶつかっていた場所の近くに住んでいた。もしそのまま住んでいたら多分逃げなかった。ここまでは来ないだろうと思ったはずだ。
・震災前は人口が約 15,700 人、犠牲者が 1,285 人、約９％の人口が一瞬にして失われた。建物は約 4,800 棟のうち約 3,700 棟、70％以上が全半壊してしまった。
・震災後、ここは高台にあるので、どんどんと避難してくる方々が来て、一番多いときで 1,000 人を超えていた。
・役場では町長を含め 40 名の職員が亡くなった。役場前にテントを張って対策本部を作っているところに津波が襲ってきた。役場の機能がストップした状態で、どこにも相談するところがないため、自分たちで避難所運営をやらざるを得なかった。
・携帯等もしばらくはつながらなかったし、電気も最初はなかった。３日目になってついた。
・ガソリンスタンドはしばらく閉じていて車が動かせない。ガソリンがなくなって車が乗り捨てられて

いる状態で、ガソリンは夜中から並んで昼頃に買えるような状態がしばらく続いた。沿線沿いの町でもそうだったので、この辺はもっと大変だったのではないかと思う。
・１か月程度経ってからある程度落ち着いて、ガソリン等も手に入るようになったが、それでもまだ大変な状態だった。
・先生方と生徒で避難所を運営するということで、ドクターキッドの名簿を作成する、日用品、布団、毛布の配布や炊き出しの手伝い、救援物資が来るとそれを配布するという手伝いを生徒たちが全部やっていた。
・あと、小さい子供が遊ぶところがないというので、格技場を開放し、生徒が一緒になって遊んであげるというようなこともしていたそうだ。
・3か月たって教室で授業を再開することになり、教室にいた避難者全員に体育館に移っていただいた。パーテーションが寄付で来たそうなので、これを組み立てて、一画一画仕切って、そこに避難している方に全部移っていただいて、生活してもらった。３か月たってもまだこのような状態だった。
・自衛隊もすぐに来てくれて、本当にありがたいと思った。
・中学校に空いている教室を貸し出したりもした。保健室に医者が常駐してくれたり、外の方に郵便局の人が来てくれたりした。
・こうした中、高校生が良くやってくれたという思いが町の方にも残っていたようだ。
・しばらく交流したい、支援したいといういろいろな団体が来て、そのたびにその交流はここでこうやるというように振り分けた。２年後にこれをどうするのか、止めようか、それとも続けるかということで、普通に戻りたいので止めてしまう学校が多かった。
・そうした中、本校の先生方は継続しようと考え、その方法として一つにまとめて組織化しようということで、生徒に名称を考えてもらい、「大槌高校復興研究会」という名前を付けた。そこでこうした交流や復興の活動を一手に引き受けることにしようということで、震災から２年後のことだったが、これからもやりましょうということではじめた。
・現在、149 名の生徒が在籍、登録している。クラブ活動はクラブ活動で生徒たちは別に入っている。
・５つの班があり、それに所属して、班の活動があるときに自分の都合が良ければそれに参加するという割とフリーで、無理しないでできる形で行っている。
・今は定点観測班、キッズステーション班、防災まちづくり班、他校交流班、広報班の５つに分けて活動している。
・定点観測班は、町内 80 か所の写真を同じ方向から年３回撮影している。震災の２年後から、神戸大学の近藤先生の研究室の大学院生に手助けしてもらいながら行っている。今年５月に 16 回目を行っていて、今度の９月に 17 回目を行う予定である。
・ホームページにも上げているが、写真を比較すると、何の変化もない。何の変化もない中、よく撮り続けたと思うが、それぞれここに何があったよねという話をしながら撮ったということだ。
・ある地点の写真を見て、何で道路がこんなに長くなっているのかと思ったのだが、道路が残ったところを全部剝がしてしまって、それに盛土をして、震災に対応できるように１ｍから２ｍ近くかさ上げして平坦にして新たな道路を作り、周りを造成して宅地にしていったということだ。まだ町中では空き地が結構多いのだが、これでもだいぶ家が建ったなという感じだ。
・こういうのが撮り続けてくれたから残るので、１回２回のものではなく、変化が分かるようなものになっている。ようやくここまで来たんだなという感じがする。
・前田建設にお世話になった。盛土などあちこちの工事で来てくれて、普通は工事現場に入れないのだ

が、許可を取ってもらい、一緒に付いていってもらい、最初は真っ平でどこがどこだか分からないのだが、前田建設の方がこの場所だよと教えてくれて、それでようやく撮影ができるようになった。高校生だけでやるのはなかなか難しい。

・毎年、生徒は変わっていくが、引き継がれており、現在まで行われてきている。

・町方復興ＣＭｒや大槌復興ＣＭＲも定点観測に協力してくれている。非常にありがたいなと思っている。

・キッズステーション班について、先ほど避難所運営の際に高校生が子ども達と遊んであげたという話をした。家から学校に来た時には子ども達は非常に元気だが、仮設住宅に戻っていくと急に暗くなってしまうので、何とか気持ちを盛り上げてくれないかという話が高校の方に来て、児童施設の方でボランティアをしようということで始まった。今は長期休業中にまとめて行っており、今年で５年連続となっている。

・ここでお世話された子ども達が大きくなって本校に入ってきて、今度は子ども達のお世話をするような循環になってきたのかなと、５年たって感じている。

・まちづくり班について、大槌町で新たに施設を作るというときに高校生の意見を聞きたいという話があり、そういうのに参加したい人を募って参加させている中で、まちづくり班として１つの班にしてきた。

・町民が気軽に利用できるコミュニティプレイスの中に千葉大学の生徒と一緒に庭造りを行った活動では、千葉や東京に視察に行ったりもした。

・大体あちこちの施設ができて、新たに意見を求められることも少なくなってきたので、今度は防災の方に行かせようということになった。町内で防災マップというものが昨年度できたので、これを活用しながら今年は防災に力を入れていこうということで、今年の 10 月に、この地区の方と町の防災室と本校で協力して防災訓練を行う予定になっている。

・避難所に逃げて終わりではなく、今度は避難所を設営するというところまでやりたいと思っている。

・他校交流班について、先ほど申し上げたように夏休みを中心として、色々なところから被災地の視察等で来てくれた高校生と交流している。

・この前、都立広尾高校が来て交流した。実はその時に使うプレゼン資料を今回、改良して使っているのだが、こういうプレゼンをすれば本校の生徒にも勉強になる。高校生同士だと 10 分も話せば仲良くなるので、いろいろな震災の体験を伝えたりしている。

・このような活動が認められて、昨年度に仙台で世界防災フォーラム、仙台東北大学とダボスとで協定を結んで、隔年ごとにお互いに開くということでその第１回目が仙台で行われたのだが、その前日祭で本校の活動を紹介した。東北みらい賞という賞も昨年度いただいた。

・また昨年度は何もないなと思っていたら、12 月には安倍総理が来るということで、誰にも言うな、３日前まで喋ってはダメだということでずっと黙り続けた。先生方とも「要人が来る」、「要人って誰ですか」、「要人は要人」という会話をしていた。

・総理のほかに吉野復興相と鈴木オリンピック・パラリンピック担当相も来た。あまりにも内密にしたせいか、それほど報道されないのでがっかりした。もうちょっと大々的に報道してくれればいいなと思った。

・今年５月に大槌町と「震災伝承活動の連携協力協定」を結んだ。町と協力し合うということで、文化交流センターで本校の活動を紹介するものを作ったり、本校もホームページに載せている定点観測は町の方でお金を出してもらうが、その代わりにデータを提供するという協定を結んでいる。全国的に

も珍しいと言われたが、吉野復興大臣の目にも触れて、この７月に感謝状をいただいている。

質疑応答

★震災後、避難所となってからの３か月は相当大変だったと思う。交流するかしないかが議論になって、組織化したとのことだったが、いろいろな議論があったのではないか。**（戸張委員長）**

⇒そのようだ。私はこの学校にいたのではないが、隣の釜石高校などは普通の学校に戻りたいということで交流を全部断りだし、本校はどうしようかという議論になったそうだが、覚悟を決めてやっていこうという話になったと聞いている。

★復興研究会の立ち上げ時に関わられた藤田さくら先生、この方はまだいらっしゃるのか。**（安田参事）**

⇒去年、転勤され、釜石高校の定時制に異動した。配布した新聞記事にさくら先生のことが載っているので、後ほど読んでほしい。

★この大槌さくらというキャラクターはなかなかユニークだが、これは生徒が作ったのか。**（安田参事）**

⇒去年、創立 100 周年のキャラクターを作ろうということになったのだが、実はもう書いた子がいた。誰にも言わないでいきなり持ってこられたので、他の生徒からも募集する形にしたのだが、これ以上のものが出なかったのでこれにすることになった。

委員・理事者の意見・感想等

★震災当時、大槌高校が避難所として利用された際、生徒が自主的に避難所運営に協力し、その活動を継続・発展させるために研究会を立ち上げ、その活動を続けているとのことだった。震災後も活動を継続することにより、震災を風化させない、次世代に伝えるといった強い志に心を打たれるとともに、生徒たちが主体的に活動することが何よりも生徒たちの防災意識を向上に繋がるということを感じた。**（秋谷委員）**

★学校が避難所になって学業にも部活などの活動にも困難があっただろうが、その経験から震災を後世に伝えて行こうという活動はすばらしいと思う。

　定点観測で復興の進み具合を写真で残すこと、児童へのボランティアを通じて被災地の子どもたちを励ますとりくみ、他校との交流で震災の経験を広げていく活動、どれもが工夫あふれるものだと思う。千代田区内の高校で交流を希望する高校もあったとのこと。残念ながら実現しなかったみたいだが、災害の実相、災害からの復興、災害を後世に伝えるということを学ぶためにも、大槌高校のようなとりくみをしている学校との交流が実現できればと思う。**（牛尾委員）**

★高校は大槌町の高台に位置し津波の被害は受けていないので、今回調査した四教育施設(小中学校)とは違い、校舎の説明は無く「学校要覧」からの説明を教頭先生から受けた。大正８年創立、来年 100 周年を迎える。生徒数は 191 名、2011.3.11 の震災時の大槌市街地は津波のため破滅的被害を被るが、高台にある高等学校は被害を免れ避難場所となり 1,000 人の被災者を１ケ月間受け入れ、４月中旬授業再開に向け教室に避難の方々に体育館に移って頂き 4 月 20 日授業を再開した。震災では全校生徒 345 人のうち６人が死亡・不明。37 人が家族を失い 180 人の家が全半壊、106 人の保護者が職を失った。2013 年１月、教員達は「復興教育」について考えていたが生徒達も「復興についての委員会が有れば」と考えていた。そして「復興研究会」が発足した。活動の柱は四つ、定期的に街の写真を撮る「定点観測班」、対外的な場で現状の報告をする「他校交流班」、復興アイデアを話し合うワークショップなどに参加する「まちづくり班」、そして被災した街の子供たちと遊んだり、勉強を教えたりする「キッズステーション」であった。

震災復興にあたり高校生たちが、町の現況、将来への記録、次世代の青少年の育成など考えよく行動をしてくれている。**（小林や委員）**

★高台の立地により津波の被害は免れたが、校舎が 1 ヶ月間避難所となった。全校生徒の半数以上が自主的に参加する復興研究会により、2013 年から定点観測として町内 180 ヵ所で同じ場所からカメラで町の変遷を撮影してきた写真は貴重な復興の記録である。本年 5 月に大槌町と学校が震災伝承活動連携協力に関する協定を結んでいる点等、学校と地域との結びつきが有意義である。**（安田参事）**

説明会場

菊池副校長による説明

質疑応答

平成３０年度

新聞記事

Ver. 3

岩手県立大槌高等学校

復興研究会に関する新聞記事

（５）釜石鵜住居復興スタジアム

施設概要

■スタジアム整備
・管理事務棟
鉄骨造（建築物）、地上１階建て、床面積 587.15 ㎡
・やぐら棟
鉄骨造（工作物）、築造面積 486.40 ㎡、高さ 24.05m

■座席数
約 6,000 席（ラグビーワールドカップ 2019 開催時 約 16,000 席）

■広場整備
敷地面積 約９ha、舗装 35,490 ㎡、側溝 1,697m、プレキャスト擁壁 11 か所
階段 25 か所、照明灯 13 基、耐震性貯水槽１基、耐震性貯留槽１基ほか

■グラウンド整備
メイングラウンド（天然芝）約 11,000 ㎡（約 130m×80m）
サブグラウンド 約 10,000 ㎡（約 120m×78m）

■工　期
平成 29 年３月 15 日～平成 30 年７月 31 日

■竣　工
平成 30 年７月 31 日

■施工者
大成建設・新光建設特定共同企業体

①釜石市ラグビーワールドカップ推進事務局　長田主任より

・現在 6,000 席が用意されている。ワールドカップの前後は 6,000 席で運営をしていくが、ワールドカップ本番の時はこれに 10,000 席を足して、16,000 席で運営していく。ワールドカップを過ぎればまた 6,000 席に戻る。
・ワールドカップ前に大きなテストマッチを行うが、それまでは 6,000 席で試合を行う。
・メインスタンドの反対側には木でできた椅子が用意されている。この席は約 5,000 席あるのだが、釜石の尾崎半島というところで昨年あった森林火災で出た杉の木を再利用している。表面は真っ黒だが、磨けば中の方はきれいな杉が残っているので、その部分を使ってこのような席を作った。
・木の椅子の前にある青い席３列は国立競技場からいただいた席で、真ん中の青い塊の前３列は東京ドームからいただいた。左側は熊本陸上競技場からいただいた席である。
・前にある３列をどこか寄付してくれないかということで、お声をかけたときに、是非ともということで送っていただいたのがこの３つで、我々は絆がある、絆で持ってきたということで絆シートと呼んでいる。
・バックスタンドにもせり出した席を３列作る予定で、それも熊本陸上競技場の席になる。
・今の 6,000 席に 10,000 席が足されるが、インゴールの裏側に 3,000 席づつ、バックスタンドに 2,000

席、メインスタンドの鉄格子のところに斜めに２階席ができ、ここに熊本からいただいた 2,000 席を付け、向こうも熊本からいただいた 2,000 席を付け、左右には木の椅子の背もたれのない部分、平椅子だけを使った 6,000 席を付けて 10,000 席を足し、ワールドカップの時は 16,000 席で運用していく。

・ウッドルーバーといい、日よけだが、それも尾崎半島で出た森林を使っている。このスタジアムの中にある木材でできたものは全て尾崎半島の火災で出たものを再利用している。

・完成したとは言えども、メインスタンドの上部はスカスカになっている。ここに木の枠組みでできたウッドルームをはめていき、ビップルームを作るなど、いろいろ使おうと計画をしている。

・上を見れば分かるが、大きな幕がある。これは船の帆だったり鳥の羽をイメージして作った。新たな船出や旅立ちという意味を込めてこういう形で作った。このスタジアム自体が復興のシンボルになるように作っているので、そういう意味も込めて作っている。

・ここはスタジアムと言いつつも公園の扱いなので、一般の方も普通に入って来られる。

・この場所自体が５ｍかさ上げされて作られている。鵜住居小学校と釜石東中学校は昨年から高台の方に移転しているのだが、このグラウンドの位置にあったのが旧鵜住居小学校で、サブグラウンドにする予定のところには旧釜石東中学校があった。後に釜石の奇跡と呼ばれる生徒全員が助かったというのがこの学校だ。

・近くに鵜住居川が流れてるが、水門を作っていて、今２門だけできている。最終的には５門作り、水門を機能させるということだが、工事中であり、ワールドカップの時には全部はできない。有事の際には水門を閉鎖して、津波を防ぐというというか、少し和らげるという機能を持たせる。併せて、水門の左側に防潮堤があるが、それも延長してフラットな状況にする。高さは 14.5m ということで、津波はこの辺りは 18m と言っていたので、東日本大震災クラスの津波が来ると超えてしまうが、それを除けば、これまでの過去 100 年間くらいの津波であればこれで収まるという設計になっている。

・ここは海がかなり近い。ワールドカップの 12 会場で海が近いのは神戸とここなのだが、神戸の場合は逃げるところがたくさんある。しかし、ここの場合には道路が１本、あと山側に隠れている山道が１本の２本しかない。鵜住居小学校と釜石東中学校の児童・生徒が手に手を取って逃げた道路が山側の道になる。避難路がこの２本しかなく、16,000 人が入ったときにどうやって逃がすかが課題になっている。

・他の会場は電車や公共交通機関が発達しているので、そちらの方で逃げられるのだが、ここの場合はそうはいかない。

・防災の話だが、例えば地震があって、第一はこの道を通って学校の方に逃げるが、それでも逃げられない場合は後ろの山側の道が約 10km 位、半島の向かい側に続いている。16,000 人が登り切れば全員入るようにはなっている。

・東日本大震災の時は地震から津波が来るまで 30 分だったが、起きてすぐに逃げればある程度は助かるのではないかと考えている。

・避難路の右側にスペースがあるが、そこで高さ約 20m。ここに留まることができるかもしれないが、孤立してしまうと２次避難を考えなければならなくなる。できるだけ陸続きのところに避難し、そこから２次避難をできるようにしなければならない。

・災害が起きたときに、バックスタンドの右後ろ位だが、耐震性の貯水槽と貯留槽があり、貯留槽は 120ｔ、トイレだったり火災の消火などに使うものである。貯水槽の方は常に 100ｔの水が循環されているので、何かあったときにすぐ使えるようになっている。

・スタジアム自体がヘリポートにもなるので、いろいろなことにも対応できるのではないかと考えてい

る。

・ラグビー場では日本で唯一ここだけしか使っていないハイブリッド天然芝というのを使っている。ハイブリッドと言うと、表面に天然と人工の芝が生えているとイメージするかもしれないが、ここの芝は表面は天然芝 100%。ただ芝の下にコルクがあり、マイクログラスファイバーがあり、その下に砂が敷いてある。表面と下で天然のものと人工のものが混ざっているからハイブリッドと呼ぶ。

・なぜ採用したかと言うと、天然芝より 1.3 億円高いのだが、10 年間で 1.9 億円経費が安く済む。なおかつコルク、マイクログラスファイバー、砂なので、芝にとってちょうどいい保水力があり、その保水力を保ったままのいい状態の水はけをしてくれるということで、手間がかかりにくい。

・マイクログラスファイバー、砂なので芝の根付きがすごくいい。ラグビーでプレイしていると芝がよく剥がれるのだが、8/19 に初めて使ったときもほぼ剥がれない状態で、そういうのもあって普通の天然芝の頻度より約 2 倍使える。かかる経費も少なければ、スタジアムを運用していく中で 2 倍使っていけるので、収益面もいい。

・雨の中で秩父宮とか他の競技場を使うと、次の日に芝が剥がれたりするのだが、今のところはそういう感じは一切していない。雨にも強い。ちょうどいい状態を保ってくれる。ゴルフでは使っていると聞いているが、ラグビーではここだけしかなく、パナソニックワイルドナイツが取り入れようかという話をしているみたいだ。

・海外や国内のいろいろなスタジアムに行ったが、ここが一番いい。まず大自然の中にスタジアムというのはなかなかない。ハイテクだったり近代的なつくりのスタジアムが多い中、このナチュラルさは他にはない。

・他のスタジアムから比べると 16,000 万人しか入らないが、30,000 万のところに結局 2,000 万しか入らないのと、16,000 万のところに 1.6 万人入るのでは、まったく迫力が違う。いろいろな人から言ってもらえるのが、大きさ的にちょうどいいということだ。

・メインスタンド側の席の一番先頭からタッチラインまで約 9.5m、バックスタンド側に席ができたら約 8 m位になる。席がせり出しているところからは、選手と同じ目線でグラウンドが見られるので、より近くに感じることができる。

質疑応答

★終わったら外してまた元の形に戻すのか。その場合、席は倉庫に入れるのか。**（戸張委員長）**

⇒終わったら、メインスタンドの上部にできた部屋はそのままにして、席は解体して業者に引き渡し、6,000 席に戻す。

★釜石のチームのホームグラウンドになるのか。**（内田委員）**

⇒今はその予定でいるが、練習で使うことはない。釜石シーウェーブスは松倉という地区に自分たちのクラブハウスがあるので、試合をするホームグラウンドがここになる。今年の 10/7 と 11/4 にシーウェーブスがここで公式戦を行う。

★ここはラグビー専門なのか。**（内田委員）**

⇒タグラグビーという競技がある。結局ラグビーなのだが、そういうのでは使うが、今のところワールドカップまではラグビー以外の球技で使う予定はない。ワールドカップが終わってからは芸術だったり音楽だったりという使い方をしていくというように今、考えており、実際音楽関係の方が来たりという話を聞いている。

★他のスポーツは規格が合わなかったりするのか。**（事務局）**

⇒サッカー場はこの中に入る。サッカーはやることが可能だし、青い絆シートの部分は取り外せるようになっているので、外せばそこに 400mのトラック 1 つの陸上競技場が作れる。そのように設計してある。

★スタジアム名から仮称は取れないのか。**（事務局）**

⇒仮称は取れた。名前は「釜石鵜住居復興スタジアム」で決定した。ちなみにこの競技場で試合をするアフリカ地区代表もナミビアに決まった。

★こけら落としをテレビでも大々的にやっていたのだが、EXILE とか来ていた。選手のみなさんの評価も高かったのか。**（内田委員）**

⇒高かった。いろいろなところでやっている選手も多いのだが、芝はスパイクの掛かりが非常に良いと、プレイする際にいいパフォーマンスが出せる。セットプレイで芝が剥がれるのが一番影響するのだが、そういうのも一切なく、EXILE が踊っても、彼らのステップでも剥がれなかった。

★まだそんなに流行っていないのは値段が高いからか。**（事務局）**

⇒ヨーロッパでは流行っているが、新たにスタジアムを作ろうというところが国内にはあまりない。今、天然芝を敷いているところに 1 回全部剥がして付けるかと言うと、それはなかなか難しい。新しく建造する際に付けるのならいいと思う。

★学校でハイブリッドを使っているところはあるのか。**（事務局）**

⇒学校は天然芝が多い。学校でやってもいいと思うが維持がすごくかかってくる。人工芝はすごく多い。

★話を聞く限りではほとんど欠点がないと思われるのだが。**（事務局）**

⇒そのとおり。しかし、流行り始めたばかりなので、やっていくうちに少しづつ欠点が出てくるとは思われる。

★両サイドはいつ頃できあがるのか。**（池田委員）**

⇒今、検討委員会で話している最中だが、今年はできない。来年からということになる。

★これだけ席を増設するとトイレの問題が出てくるのではないか。**（事務局）**

⇒それはこの前、6,000 人で試合を行った時にも出てきた課題だ。トイレに 30 分位待ったということだ。常設では 2 か所しかトイレがない。この前の時は仮設トイレを 4 つくらい足したのだが、それでも足りなかった。仮設をどこかにおいて解決するしかない。

10/7 にあるトップリーグの試合でも、6,000 人入るかどうか分からないが、ある程度人が入るので、どのように用意するのかが課題である。

★送迎バスはどこからか出ているのか。**（池田委員）**

⇒シャトルバスを出す。国道をちょっと入ったところで車両が通行止めになるので、シャトルバスかタクシーに乗って来ることになる。三陸鉄道山田線が 3 月に開通し、近くに駅ができるので、ワールドカップの時はもう少し便利になる。6,000 人の時の運用が基本形になる。

★近くに食事する場所はないのか。**（事務局）**

⇒この辺にはない。釜石に行ってもらうか、大槌の方にいってもらうしかないが、この前の時は屋台が出ていた。

委員・理事者の意見・感想等

★2017 年 5 月に発生した山林火災の被害木(スギ約 800 本)を活用し、木製シート 4990 席、ベンチ 108 基、トイレ 2 棟、日よけのためのルーパーを設置するなどして、素材から環境に配慮されたものを使用しており、素晴らしいなと感じた。**(秋谷委員)**

★これまで見てきた学校と違い余裕は感じられなかった。スタジアムの駐車場が少ない、スタジアムの客席から避難がしにくいのではと思った。ワールドカップ開催に合わせてつくっているわけだが、まだ、色々な安全対策が必要だと思う。しかし、新しく出来た素晴らしいグランドを見るとここから釜石が活気を取り戻す希望が見えた。**(小林た委員)**

★東京ドームのイスを一部使用されている復興スタジアムが完成した釜石鵜住居ではまだまだ周囲に観光はなにもなかった。ワールドカップ終了後の活用の仕方、小学校、中学校の跡地に完成したスタジアムなので、子どもたちのためのイベントなど継続的に実施されることを期待する。**(池田委員)**

★釜石市鵜住居地区は、10m を超える津波に襲われた際、小中学校の生徒たち 600 人が手に手を取って逃げた率先避難行動で有名な防災を象徴する場所である。そこに完成したのが、釜石鵜住居復興スタジアムである。三陸被災地のスポーツ施設不足の解消、国際・国内スポーツ大会をはじめ各種イベントの開催、そして、震災の記憶と防災の知恵を伝える場所として整備された。最新のハイブリッド天然芝は選手の評価も大変高く木製のシートには昨年山林火災で被害にあったスギ 800 本が活用されている。来年開催されるラグビーワールドカップの会場にも決定しており、スポーツの力による地域の創生も期待されている。**(内田委員)**

★ラグビーワールドカップ 2019 の開催地のひとつとして、被災地で唯一選定された釜石市が津波で被災した小中学校跡地に復興と希望のシンボルとして建設し、本年 7 月末に竣工した。スポーツをはじめ各種イベント開催に活用できる競技場は観客席からの視認性も良く、立地条件を踏まえて工夫している。仮設スタンドも整備してフルスペックの状態で使用する際、大規模災害が発災した場合の避難経路に一層の検討が求められるのではないか。**(安田参事)**

長田主任（写真右）から説明を受ける

メインスタンドからの眺め
ハイブリッド芝生がとてもきれいだ

青いシートは「絆シート」

バックスタンドの木製の席

メインスタンド、今は何もない

メインスタンド２階
ビップルームなどの設置を検討中

メインスタンド裏のウッドルーバー
火災で出た木を再利用している

水門と切り立った山が見える
ここも海からかなり近い

（６）釜石市立鵜住居幼稚園・小学校、釜石東中学校

今回の調査では、内部に入ることができなかったため、外部からの施設見学となった。３つの施設をつなぐ通路があり、正面には大階段がある。この大階段を施設の入口まで登り、振り向くと釜石・鵜住居地区の現在の様子を一望することができた。

それほど遠くないところに海と工事中の防潮堤、水門が見え、ここも海の近くなのだと改めて認識した。また、海の右側には切り立った山があり、そのすぐ手前には釜石鵜住居復興スタジアムが見えた。恐らく、この辺りは全て津波で押し流されてしまったのであろう、7 年経った今も建物はほとんどない。道路や土地造成工事の車両、クレーン車などが雨の中、作業をしており、復興へ道のりはまだまだ遠いと感じた。

大階段の下から撮影
写真左が鵜住居小学校

大階段の上から撮影
工事車両が見えるが、建物はほとんどない

大階段の上から撮影
遠くに海と山が見える

最上段の横を撮影
小学校の校庭が少し見える

（７）大槌町立大槌学園

施設概要

■敷地
用地面積 24,348.83 ㎡
■構造・規模
・校舎棟
木造＋鉄筋コンクリート造、２階建て
延床面積 8,873.62 ㎡
・屋内運動場棟
木造＋鉄筋コンクリート造、２階建て
延床面積　3,600.54 ㎡
・プール棟
木造、平屋建て
延床面積　199.80 ㎡
・駐輪場棟
木造＋鉄筋コンクリート造、２階建て
延床面積　375.42 ㎡

工事概要

■設計・監理
昭和・久慈設計共同体
■施工
㈱錢高組
■工期
平成 26 年 12 月～平成 28 年９月

①伊藤教育長より挨拶

・ここ４年くらい、本町の教育委員会には江東区から２人の方に応援に来ていただいている。震災直後の４月には東京都の教育委員会から指導主事の先生や事務の方々に応援に来ていただき大変お世話になった。
・当時は、支援物資を蓄える場所の関係で、中央公民館が災害対策本部になっていた。東京都からの応援派遣の先生方は寝る場所がないので、４月でも雪が降ることがある中で盛岡から２時間かけて大槌町まで通っていただき、学校の再開に向けて、あるいは支援物資の処理に向けて５月頃までご支援をいただいた。現在も東京都から多くの方に応援に来ていただいている。
・ここに来る途中で町の様子をご覧になったと思うが、７年半経って、今、このような状況だ。仮設住宅に住んでいる人もまだいるし、約 12%の子どもが仮設住宅から通っているような状況だ。
・家も見えてきて、町並みも少しづつ出来てきている。災害公営住宅は８割方完成し、計画の約 900 戸が年度内には完成する見込みだ。そうなれば仮設に住む人もいなくなるんだろうとは思うが、状況も

変化していて、仮設で暮らす中で家族構成が変わったり、あるいは将来の生活設計が変わったりして、仮設住宅が戸数分できたからといって全部そこに収まるかというと、そこはなかなか難しい。個々に抱えている問題が違うので、十把一絡げにやるのはなかなか難しい。

・学校教育も同じ。まちづくりと学校がどう関わりあい、防災等とどのように折り合いをつけながら学校教育を進めていくのか、分かる範囲でお答えしたい。

②伊藤教育長、小石学務課長、松橋学園長より

ｉ）防災教育について

・大槌学園の防災の取り組みについて、避難訓練を年４回行っている。また９月を防災学習月間として、さまざまな活動を行っている。

・本学園のほかにもう１つ、吉里吉里学園というところがあり、ここは分離型の小中一貫教育校だが、そちらは避難訓練を年４回、また 10 月に防災週間を実施している。その中で心のケアに関わることや地域防災として地域住民を交えての避難訓練なども行っている。

・両学園とも、ふるさと科の中でも各学年ごとに防災教育に取り組んでいる

・ふるさと科について、本科で狙っているものは大槌町の復興・発展を担う人材の育成で、復興・防災を基盤とした生きる力、ふるさと創生を推進するものである。

・生きる力とはそこにあるように命やものの大切さと人の絆の大切さを受け止め、人としての在り方や自らの生き方を考え見つめる。そして、ふるさと創生というのは地域復興を目指すふるさとの中で自らの役割や責任を考え、ふるさとを支える担い手になるということで、大槌町独自の科目として１年生から９年生まで全員学んでいるものである。総合的な学習の時間と特別活動の一部、１、２年生だと生活科の一部を使って週 70 時間位学習している。

・ふるさと科には３つの柱があるが、柱の３番目に防災教育を中心とした学びというのを位置づけている。これは命の大切さを見つめ、主体的に判断し、行動する学びとして、郷土の自然、地形や災害体制の意義について理解を深め、災害時や防災に対しての主体的な判断力と実践力を育成するというもので、全ての学年が取り組んでいる。

・その一例として、先ほど述べた吉里吉里学園における防災週間がある。地域と一緒の防災訓練のほか、町役場の福祉課から日本赤十字社の方を紹介していただき AED を活用した救急救命法なども学んでいる。

・地域との避難訓練においては、実際にサイレンを鳴らしてもらい、消防署の協力もいただきながら、合同の訓練も実施している。

・東日本大震災を経験し、不安定になってしまった子ども達、要サポートの子ども達がたくさんいる。７年経ったが、まだサイレンを聞くとドキッとするとか大雨、台風と聞くと少し思い出すというような児童・生徒もいる。

・心のケアについては、スクールカウンセラーやスクール・ソーシャル・ワーカーを常時配置し、日々サポートに取り組んでいるが、この防災週間の中でも自分で落ち着かせる方法とか、そのような学習も毎年繰り返し行っているところである。

・子ども達の防災についての学びと、それから防災について学校施設に実際に関わってくるのが被災後に避難した人たちをどう受け入れ避難所を運営していくか、あるいは地域との関わりをどうするかということである。学校教育と避難所運営をどうやって両立するかということを踏まえ、校舎を作った。

・これまで、マイクで「避難してください」と言い、子ども達が校庭に逃げて行き、校長先生が「今日

は3分 10 秒で目標達成です。はい終わり」というような避難訓練がなされてきたようだが、それだけではダメだろうと思う。逃げるスキルだけではなく、災害の歴史も学ばなければならないし、ここの自然がどういう災害につながり、どういう対応ができているのかといったことも勉強しなければならない。

・地震のメカニズムや災害のメカニズムなど、いわゆるアカデミックな勉強もしている。地震が起きると津波が来るが、それがプレートの地震なのか活断層による地震なのかによって津波の発生がどう変わるのかということも勉強するし、避難所での自分たちの対応、例えば怪我への対応ということで救急の勉強もする。

・3.11 には中高生が避難所で働いてくれた。自分たちの判断で物資の仕分けからトイレの掃除など、さまざまなことをやってくれた。子ども達は避難所の運営なり一つの力になる。

・働き手としてということだけではなく、子ども達の動きそのものが避難している年配の方々に希望を与えてくれる。こうしてはいられないということで頑張ってくれたり、すごく大きな力になる。今後は、子ども達が避難所運営などで自分たちの役割を積極的に見出すことができるよう考えながら防災教育を進めていきたい。

・岩手県は夏も割と涼しくて、エアコンが付いている学校は1％位。付いていても保健室と会議室位だが、この校舎は全教室にエアコンを入れた。

・体育館もほとんど暖房設備がないのだが、3.11 の反省を踏まえ、暖房が入るようにした。3.11 の時は暖房がないので、避難してきた方々のために緞帳までは切らなかったが、マットとか天井の一文字幕など手が届くところの布は大体新聞紙半分くらいの大きさに切って配布した。避難者はそれを体に巻いたり、首に巻いたり、背中に巻いたりしたという状況だったので、今回は体育館にも暖房が入るようになっている。

・子ども達が自分の目で実際に場所を確かめながら防災マップを作り、先輩たちが作ったものに更に修正を加えるということをふるさと科の中の防災教育の取組みとして行っている。実際に歩くことで、ここにこういうのがあるというのを体験しながら学んでいる。

・去年は8年生が自分たちの手で防災マップを作った。今日、歩いてきたけどここで工事が始まっているので逃げるときはここを避けるとか、子ども達の目線で見られるマップを日々更新していくことを通じて、日常的な防災の意識だとか感覚の向上を図っている。単に防災訓練をやりました、終わりましたではなく、日常的な意識の積み重ねが必要だと思う。

・震災から現在に至るまでの語り部に9年生が取り組んでおり、学園祭で発信をしたり、あるいはこれまでに支援をしていただいた長野県の軽井沢町や秋田の大仙市との交流もあり、そこに行って子ども達が自分の言葉でまとめたものを発表して、それを町民にも他県の方にも知っていただくという活動をしている。9年生できちんとした調べ学習をしておいて、更に大槌高校に行って復興研究会に所属しながらまた深めていくというように、継続してやっていけるような取り組みになっている。

・今年の1年生は震災の後に生まれているので、震災の記憶はないが、仮設暮らしだとかそういったことで間接的に経験はしてきているので、何らかの形で影響があり、真剣に取り組んでいると思っている。

・大人たちが一生懸命に頑張ってまちを復興させようとしているので、そうした姿を見ながら自分たちも将来はまちの復興に役立ちたいというようにつなげていければと思っている。

・よく風化の話があるが、3年すれば忘れてしまう、世代が変われば忘れてしまうことになりかねない。どういう形で語り継いでいくか、1つ作戦を練っており、小中一貫教育をこれからも教育の基盤とし

てきちんと位置付けていくため、子どもの学びの例を作ろうと考えている。理念条例にはなるが、その中に防災学習を位置づけようと思う。風化を防ぐ唯一の手立てとして条例の制定に向け動き出したところだ。

・3/11 は土曜日であれ日曜日であれウィークデーであれ授業日にして語り継いでいく。1 年生あるいは幼稚園から高校、成人になるまできちんと防災のことや震災の歴史などを語り継いでいく。教育がやらなければ、誰もやらなくなるのできっと風化するんだろうなと思う。そこは教育の責任できちんとした位置づけをして、語り継いでいきたいと思っている。

・今、3.11 の追悼式をやっており、代表の子ども 2 人が式辞を読んでいるが、そうではなく例えば 6 年生全員が毎年、追悼式に行って献花する、そうやって語り継いでいくということもやっていきたいと思っている。

・今年はきちんとやりたいと思っているが、11/5 に津波防災の日がある。町内の各自治会で訓練などをやるのだが参加が悪いので、まず学校で話をして、こういう趣旨でやるから朝、短時間ではあるけれども各地区の行事に親子で参加するようにと学校からも情報発信をして、参加率を上げたいと思っている。

・大槌というとどうしても津波というように捉えられるのだが、それ以外の土砂崩れや河川の氾濫などもある。子ども達は将来、どこに行って生活するか分からないので、ありとあらゆる災害に対応する力が必要だろうなと思っている。避難所での生活はどうやってするのかなども教えていきたいと考えている。

ii）ふるさと科について

・防災教育を中心とした学び以外のふるさと科の取り組みのうち、地域への愛着を育む学びについて、特徴的なのは地域の人たちを講師に授業を進めていることである。地域のことは、学校の先生方より地域の人が良く知っている。多くの地域の方々が鮭の学習だったり、わかめの学習だったり、まち探検だったり、郷土芸能などに相当関わってくれている。

・地域の方々に講師になっていただくためには、コーディネートをしなければいけない。先生方だったら職員室で話し合って進められるが、地域の人を呼ぶとなるとまず誰を呼べばいいかから始まる。今、校舎の井戸端会議室にコーディネータが常駐しているが、彼らが人と人とをつないだり、相談役と言うか地域と学校をうまくつないでくれている。

・ふるさと科の 3 つの柱の視点に沿ったカリキュラムを 1 年生から 9 年生までそれぞれに作り、やってきている。 3 年生と 6 年生が同じことをやっては意味がないので、系統的に入れるということを意識して、とにかく地域に出て、地域の人から話を聞く。先生方も一緒に出て、地域を知って、それを元にどうしたらいいかという学びをするという形で進めている。

・延べ人数で言うと、年間 1,000 名以上の地域の方にここに来てやっていただいている。最高齢は 90 歳を超えたおばあちゃんがいるが、この方は震災で自分以外の家族が全員亡くなっていて、閉じこもらないよう学校に来てもらうことから始めた。この歳で学校に来ることになるとは思わなかったと言っていたが、今では来るのが生きがいだ、子ども達が声をかけてくれるし、挨拶もしてくれるし、年賀状も届くと言っている。そういう方が非常に多く、1 年生に昔遊びを教えてくれるおじいちゃんも子どもとハイタッチをしている。

・自分の孫が通っていなくても来ることができるので、子ども達は地域のおじいちゃん、おばあちゃんを知ることができるし、地域の人も子どもを知ることができるので、大人と子どもの距離が近くなった。大人に見守ってもらえるというのがあるし、子ども達が将来、この地を出ていくときに、大槌

ではこういう仕事でみんなが頑張っているだとか、こういう産業があるということをどんどん知ることによって、大槌町に自信、誇りが持てるようになる。

・昨日まで8年生が盛岡に行って、宿泊研修をやってきた。その中で大槌の特産品を持っていき物販をした。9年生はチラシを作り、修学旅行で上野公園に行ってチラシを配布してファックスとかネットで販売ができるようにした。

・子ども達も大人の姿を見て憧れを持って頑張って何かをしなければいけないというようになってきたし、地域で何かボランティアができるのではないかという雰囲気にもなってきている。震災直後にもボランティアの話はあったのだが、その時は工事中で安全ではなかったのでできなかった。今はできるようになってきたので、これからは地域のボランティア活動に保護者が入ってきて、地域が入ってきて、コミュニティがつながればいいと思う。時間はかかるがそこを目指して、まず足がかりを作っていきたい。

・ここは吉里吉里と違い、津波で何もかもなくなった状態から新しいコミュニティを作らなければならない。その核となるのが子ども達であり、子どもを中心に親、そして地域がつながっていく。普通は自治体から親、そして子どもへと広げていくのだと思うが、逆の発想でいかなければ厳しい。時間はかかるし障害もあるが、何とか復興をやらなければいけない。

・将来20年、30年経ったときに、ここの子ども達が何人残るか分からないが、自分たちが大人になったときに地域に子どもに関われるようにというところまでを見据えてやっている。

・先生方はどうしても変わってしまうが、地域の方と子ども達は残る。ただ先生方にも、ここにいる以上は地域を知りなさいということでどんどん地域へ出している。開かれた学校とは言うが、学校は開いているのでどうぞ来てくださいというスタンスでは、どうしても敷居が高いので誰も来ない。だから開くのではなく出ていけばいいという発想で、子ども達も先生も地域に出ていってもらう。

・最初に作った「ふるさと科リーフレット」は13種類ある。1年生から9年生までのだいたいの学習内容が入っているが、これではちょっと足りなくなってきたので、「ふるさと科アプリ」を作ってもらったという状況だ。

・ふるさとへの自信を持ちながら生きていける子ども、人材を育てていきたい。大槌は海というイメージがあるが実は山もあり、農業などいろいろな職種があるので、どんどん知ってもらうところからはじめて、将来子ども達にこのまちを託すところまで考えてやっている。ふるさと科の取り組みは有意義だと感じる。

・何よりもこれによって子ども達の自己肯定感が増した。自分にもやれることがあるとか、いいところもあるというのがすごく増えて、今では8割の子ども達が自分のことが好き、いいところがあるとなってきている。

・子ども達には、出身を聞かれたら岩手の大槌町でこういうところですというのを自信を持って言ってもらえるようにしたいと思っている。

・ふるさと科は低学年では頭の勉強ではなく体の勉強で、地域に出て行って学ぶ。3、4年生を対象とした副読本があるが、そういうものを作ってしまうと、転任してきた先生がそれを読むだけという社会科の勉強で終わってしまう。ふるさと科は座学ではなく外に出て行って学ぶ、臭いを感じて、空気を感じて、想いを感じて学ぶということで、副読本ではない副読本を作ったり、アプリを開発してやっている。

・井戸端会議室には、本学園に関わってくれる地域の方々がいるが、学び直しをしてから子ども達にいろいろと教えてくれている。ふるさと科は生涯学習の視点を取り入れた取り組みになっていると言

っても過言ではない。

・今、1年生から9年生までがチームを作って掃除をしているが、そこに井戸端会議室に来たおばあちゃんたちが一緒に入って箒の使い方を教えてくれたりしている。

・先生方にも井戸端会議室に来ている地域の人と話してもらっているので、誰が先生だということが地域の方に分かってもらえるし、先生方の顔写真を貼ってあるので、名前と顔を覚えてもらえるのは大きい。

・明日、3年生が海探検に行くのだが、そういうのも担任と地域の方々でやっていただている。

ⅲ）小中一貫教育について

・震災前の中学校1校に小学校4校が集まり本学園になった。ご多分に漏れず低学力、児童・生徒指導困難校で、授業が成り立たない状況があった。低学力と非行は分かちがたく、表裏一体のもので、その中で中1ギャップと言われる問題が低学力、生徒指導困難に大きくかかってくる。

・よく小中の文化の違いだとかいうが、子育てに文化の違いなんかあるはずがない。しかし、高校受験直前の子が5年生の約分ができないとか小数の計算ができないということもあり、小学校のツケをそのまま払うというか残したまま中学校に行っているような状況だった。

・小学校の先生は、小学校の時はこんなにいい子、できたのに中学校に行った途端にだめになった、中学校の先生は何をしているんだと言うし、一方で中学校の先生は小学校で何をしてきたんだと言う。中学校の先生が小学校の教科書を見たり、小学校の先生が中学校の教科書を見ることはまずない。そういった中で、小中の連携をしなければならないということを強く感じた。

・小中一貫教育については、平成17年から協議会がスタートしているが、震災前からの課題を解決し、学校を立て直し、さらには復興を進めるため手立てはこれしかないと思い小中一貫教育の導入を進めた。

・議会とも衝突をして、説得しながら進めたが、一番の抵抗勢力は先生方だ。70年間6・3制にどっぷりと浸かっている。中学校の先生たちは教科担任制にしているのでそうでもないのだが、小学校の先生は学級担任制なので、抵抗が大きかった。津波で何にもなくなってしまったからこそ新しいことができる、そう思いながら先生方を説得し、小中一貫教育を進めていった。

質疑応答

★年4回の防災訓練を行うとのことだが、毎回同じようなことをするのか、それともさまざまなシチュエーションを考えているのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒火災と地震の訓練を交互にやっている。また、隣が大槌高校で校舎が隣同士なので、一緒に避難訓練をしようという話を進めているところだ。大槌高校の方が本校よりさらに高台なので、津波の避難訓練の時はそちらに逃げるようにしている。

　本校は海抜34m位で、大槌湾の吉里吉里地区の最大の高さは22m位なので、ここは津波に対しては大丈夫だが、火災とか風水害とかにも備えなければならない。

★震災から7年くらい経って、例えば1年生であれば震災を知らないし、これからそういった子が増えてくるが、これから子ども達に震災の経験を語り継いでいくということについては、どう取り組んでいるのか。**（牛尾委員）**

⇒各学年ごとに年間計画を作って進めているが、ふるさと科の特徴の1つにアプリがある。「ふるさと科アプリ」を開くと、実際に津波の時のまちの様子や大槌高校の復興研究会による定点観測も見ることができるので、まちの復興の様子なども分かる。アプリの入ったタブレットを持って学校の外に行

き、カメラに収めたりして、自分たちの学んだことをデータとして残したりして、下の学年に受け継いでいけるようにする。アプリは今年開発し、実際に動き始めているというところだ。

最初の数年は子ども達に震災の画像、映像を見せるのを抑えてきたが、少しづつ様子を見ながら語り継いでいかなければならないということで、大槌学園の特徴の１つである語り部の活動をしている。

９年生が毎年文化祭で震災のことを語り継いでいくということで、自分たちの言葉、声で地域に発信するという活動を行っている。

★大槌学園を出たお子さんはやはり大槌高校に行くのが多いのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒２～３年前までは大体６割が大槌高校で、２割が釜石市内にある高校、残り２割は管外、盛岡とか花巻とか、野球だと盛岡第付属、花巻東、サッカーだと遠野、盛岡商業などだった。ただ、母数がだんだん少なくなってきており、大槌高校に進学する子どもの数は減っている。

★まだ 2,000 世帯弱が仮設住宅に住んでいるという話があった。当時、あれだけど被害が出たので、町の外に出た方、あるいは県外に出た方はなかなか戻って来られない状況だと思うが、現在何人くらいの子どもが帰ってきているのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒１～６年生が 400 名、７～９年生が 214 名の計 614 名いるが、間もなく２名増える予定だ。帰ってきた子もいれば、戻ってきたが家庭の状況によりまた出て行った子もいる。戻ってきても親の職、就労の場所の問題もある。水産加工が一番多く、それから当時は福祉介護施設が多かったのだが、今も就労の環境が十分ではない。子どもだけ帰ってくるわけにはいかないので、そういった問題もまだある。

これからは若い人たちの就労の問題も出てくる。有効求人倍率は高くなってきているが、ミスマッチの部分があり、なかなかうまくいかない。今、住民基本台帳上では 11,960 人位がいるが、住所を残して外に働きに行っている方、大学生などが 2,000 人位はおり、実際に住んでいるのは 10,000 人位だ。後は復興作業で来てくれて、住所がない人が 500 人位いるので、増田レポートにあるような 10 年先の状況が表れてきている。

★震災前の住民基本台帳人口はどのくらいだったのか。**（たかざわ副委員長）**

⇒15,994 人だ。本学園は、一昨年の４月スタート時は 777 人だったが、震災前からも少子化の自然減が続いており、年間 30 人づつ位減っており、震災前からも学校の適正配置の動きがあった。

★先ほど外国人の方がいた。地震があり津波がありこういうことになってしまったが、外国の方に来て教育に携わってもらえればいいのかなと直感的に思った。なおかつ外国人、海外の先生も東京で教育を教えているよりも力を出し切れるのではないかと思う。そういう海外の方を受け入れていけば、新しい教育の面が出てくるのではないかと思った。**（小林た委員）**

⇒彼は 27 歳になるが、カリフォルニア州のサンフランシスコから北に 200 マイル位のところにある大槌町の姉妹都市、フォートブラック市の出身だ。震災前にもフォートブラックからＥＬＴ（English Language Teacher、英語指導助手）を雇おうとしていたが、話をしている途上で津波が起き、遅れていた。

彼は今年で３年目になる。前は派遣会社からＥＬＴを雇っていたが、契約で土日は授業ができない、授業以外はやってはいけないなど、かなり使い勝手が悪かった。それでフォートブラックから臨時の特別職として来ていただいているが、地域にも溶け込んでいるし、地域のコーラスグループに入ってピアノ弾いたりとか歌ったりとかあるいは英会話教室をやってくれたりとか、英語教育だけではなく、異文化交流に成果を発揮している。

彼のいいのは日本語を日本人以上に話せることだ。敬語も使えて「久しく食べてませんね」とか言っている。彼のすごいところは子ども達には絶対に日本語で話しかけないこと。子どもと話す時は必

ず英語、先生方と話す時は日本語、それくらい徹底して、子ども達も会うと普通に英語で話しかける。学校にどんどん意見も言ってくれるし、各地の研修にも行ってくれるので助かっている。非常に貴重な存在だ。

彼だけではなく、震災後はいろいろな方が入ってきて、支援してくれたりしてつながりができ、外部との関係づくりがはじまった。今までは井の中の蛙だったが、色々な価値観があるということを子ども達が学べる、その一つ目が外国の方に来て教えていただくことだった。来月、フォートブラックから短期留学だが交流で留学生が来る。引率の大人も来て、学園長の家が大人のホームステイ先になっている。

また、去年までは英検の受験料３回分を町で全部賄っていた。財政的にも厳しいので、今では年２回分の受験料を負担しているが、９年生までの英検３級の取得率が間もなく 50%になる。９年生で準２級を取得する子が去年５人位いた。

★小中一貫体制を選択した理由と学園のネーミングに込められた意味、それから吉里吉里学園との違いについて教えてほしい。**（内田委員）**

まず、学園の名前については、保護者との話し合いの中で募集して決めた。さまざまなものが出た中で学園というと私立みたいな感じがするが、小中一貫教育の学校として生まれ変わるので採用した。後はひらがながいいか漢字がいいかという位で、ひらがなの方が子ども達にも分かりやすくていいという人もいたが、一方では大槌の地名が入っているとどこの学校だか分かるということで「大槌学園」とした。

大槌学園は震災前の学区がなくなってしまった。元に戻るという選択肢はない。学区は全部浸水区域なので。新しいコミュニティを作った中での学校で、一方、吉里吉里は学校が残っている。小・中学校が２つ残っているし、吉里吉里は大槌よりも地域のまとまりが強くて、学校教育についても子どもがいる人もいない人も、子育てが終わった人もみんな協力してくれる。そういう熱い想いがあるところだったので、学校も残っているし地域の良さ、コミュニティの良さを小中一貫教育の中で活用できると考え、併設型とした。

一番の違いは、大槌学園は学校教育法上の新しい義務教育学校なので卒業証書が１枚、入学式が１回、卒業式も１回だが、吉里吉里学園は学校教育法上の小学校、中学校であり、それぞれに入学式、卒業式がある。そこが一番の違いだ。吉里吉里学園の小中一貫教育は法律の運用でやっている。大槌学園は法律に則った義務教育学校ということで、先生方の辞令も大槌学園である。

校長による学校経営として何ができるかというと、先生方の配置について、例えば８年生の体育と６年生の体育を同じ先生が持つとか、５年生のつまづき学習と７年生の数学を同じ先生が持つということができる。そうするとその教科の系統性というか、５年生でここまでやっているのだから７年生ではここまで教えるというのができる。６年生の社会と８年生の歴史がダブっては無駄だし、外しても空白が出てきてしまう。一般的な言い方をすれば教科担任制なのだが、校長（学園長）の裁量で単なる教科担任を超えた小中一貫教育の義務教育学校ならではの教育ができる。

今年度、５年生が教科担任制で理科、音楽、外国語の３教科となっており、６年生は社会をプラスして４教科を教科担任制でやっている。理科については、小学校・中学校の両方の教員免許を持っている先生がいたので、去年は９年生の担任をしていたのだが、今年は５、６、７年生の理科を持ってもらっている。

先生の方が良かったと言う。レベルの差はあるのだが、教科によっては結局５年生と中１（７年生）で同じことをやる。ここまでやっていれば次はここまでやれる、ここを濃くやれるというのが今まで

は分からなかったのでゼロからやっており時間がかかっていたのだが、ここまでの基本は５年生でやっているので、７年生ではステップアップしたものができ、内容を濃くしたり時間をかけられるようになったという声があった。音楽にしても系統的にやれるし、外国語も英語の免許を持っている先生方がいっぱいいるので、ＥＬＴが入り、低学年の子ども達も興味関心が沸いてきており、英語については取り組みが良くなってきている。

本当は９年生の担任に翌年は３年生の担任も持ってもらうということもできるのだが、小中両方の免許を持っている先生が少なくて今はできていない。しかし、一部教科担任制はやれるし、有効的な手立てではあるかなと思っている。

本校の場合、１～６年生と７～９年生の授業を受け持つ先生がお互いに意見を出して、例えば算数でここをどう教えたらいいか分からないという時は後期の数学の先生方が入ってきて、こうした方がいいとか、ここは丁寧にやった方がいいとか話し合いながらやるので、先生方は友好的かなと思う。

③伊藤教育長、小石学務課長、松橋学園長による施設案内

・１階に１～４年生、２階に５～９年生の教室があり、１階は 45 分授業、２階は 50 分授業となっている。５年生から 50 分授業になる。
・１～４年生は前期、５～７年生は中期、８～９年生は後期と３つに分けている。
・２階は奥から生徒会室と５年生、６年生の教室があり、多目的教室では少人数指導をやっている。
・全部の教室にエアコンが入っている。
・校舎棟の南側はほぼ木造だが、北側には特別教室があり、火を使うのでＲＣ造となっている。
・第一体育館が避難所になるので、避難者が長期滞在する時に校舎棟１階の技術室、被服室、調理室とお互いに行き来できるようになっている。授業と避難所運営が同時にできるような作りになっている。
・大きな階段があり、表現の階段と言っているが、大体視察に来た方はここで記念撮影をしていく。
・用務員の部屋も作ってあり、そこで作業をしたり休んだりしてもらっている。
・木の柱は中まで全部木でできており、コンクリは入っていない。
・廊下のあちこちにスペースがあり、いろいろな使い方ができる。理解できない子どもを連れてきて個別指導したり、落ち着かない子どもを連れてきて本を読ませたりしている。全部見渡せるので、何をしているのか一目瞭然だ。
・いろいろなところに収納があるので、床には何も置いていない。消火器も全て壁中に収納している。
・壁や白いところだけに掲示をしており、余計なものは極力貼らないようにしている。
・校舎内全部にＷｉ－Ｆｉが飛んでいるので、全教室にＰＣと一緒に電子黒板を設置してある。ネットにすぐにつながる状態で、データなどは電子黒板ですぐに見られるようになっている。
・本学園にはパソコンルームというものはない。Ｗｉ－Ｆｉが飛んでいるので、高学年になると教室などにタブレットを持ち込んで使っている。ただ、タブレットの数が少ないので教育委員会や町長にお願いをしているところだ。
・生徒指導困難校だったのだが、昔はガラスなども結構壊されて、掲示物なんかもすぐ剥がされていたが、今は一切ない。びっくりするくらいガラス１枚壊されない。
・他の学校ではまず無理だと思うが、ここは一般備品で１億５千万円位のものを入れた。普通の学校だったら２千万入ったらまあすごいのだが、災害復旧の初度調弁で入れることができた。
・昨日、雨の中、校庭で生徒が走っていた。駅伝の県大会が近いし、新人戦も間もなくなのでやっていたのだと思う。

※特別支援学級等

・知的と情緒に分かれている。

・通級の常用教室のサイドは相談室になっている。スクールカウンセラー、スクール・ソーシャル・ワーカーが来て面談をして、保護者が来て面談ができるようになっている。プライバシーは守られるようになっている。

※保健室

・1～9年生用なので広い。ベッドは6床で2つは折り畳み式になっている。養護教諭は今は2名だが、子どもたちの心のケアがあるので、多いときは4名いた。

・インフルエンザになってしまうと長い。今年になって1月から7月位までずっとインフルエンザが続いており、いつ終わるのだろうと心配した。

※普通教室

・廊下に対して教室の入り口が凸凹している。あえてフラットな形にしなかったのだが、これでかなり騒音が消える。閉めてしまうと全然分からない。

・ご覧になって分かるように普通教室は横長だ。教科書がＡ４版になったので、机もＡ４サイズ対応で横幅が広くなり、教室を横長にして縦は短くしている。

・子どもの机は1年生から9年生まで同じものを使っている。全部高さ調整ができるようになっている。天板が壊れたら天板だけ交換すればいいので無駄なく使える。

・黒板も上げ下げができるようになっていて、一番上まで上げれば、高学年でも見やすい。また、ドットが入っているので、１マスにノート１マスと同じように書け、ノートが取りやすい。中学校の先生も字が丁寧になり、曲がらなくなった。

・ロッカーもランドセルと道具箱が入るように大きめにしてある。

・２階の普通教室のロッカーはさらに一段高くなっており、部活動の用具も入れられるようになっている。天井も高い。一応、６年生の３学期から部活動に入るようになっている。

・教室の表示も外せるようになっていて、将来的に教室の変更ができるようにしている。

※図書室

・９学年分の蔵書があるのでかなり広い。

・閲覧用のテーブルがある。町の図書館支援員に毎日来てもらっている。

・仮設の時には中学生の本が少なかった。今、後期の本を増やしている状況だ。

・飾りは月1回、町内のボランティアの方が来て、季節ごとに変えてくれる。

・来月の26日で2年になるが、まだ木の匂いがしている。

※調理室・被服室

・食事を作って体育館に運べるようになっている。ＩＨではなくプロパンガスを使っている。電気がダメになってもプロパンガスで調理ができる。その下にはオーブンやグリルが9台あるし、電気が無事なら電子レンジもいっぱいあるので十分食事は賄える。

・被服室、家庭科室にはミシンや洗濯機があり、一般に開放ができる。メジャーが机に付いている。

・調理室は、地域の方も使うので、まな板などは殺菌している。電子レンジからほとんど全て揃っている。

※理科室

・第一と第二の2つがある。第二は火が使える。

・椅子は背もたれがなく、割と安定している。片付けも楽だ。

※美術室・図工室

・机を立てて、絵が描けるようになっている。

・美術室と図工室は、片付けが早くできるよう水道の蛇口を倍にしている。そうしないと時間を有効に使えないの。後片付けが早くできるように、途中で直した。

・テラスが３か所あり、合唱練習などに使える。

・図工室では木工などをやっている。

・５年生以上の昇降口は２階にある。１階は４年生までの昇降口。長靴が入るように下駄箱を高くしている

※音楽室

・当時の指導主事が音楽の先生だったので、音楽室にはこだわった。私（学園長）は体育なので体育館にはこだわった。

・吹奏楽部は部員が少なくて 10 名ちょっとしかいない。ただ金管バンドもある。大槌中学校の伝統を引き継いでいる。

・グランドピアノは高知の社会福祉事業団と日本プロゴルフ協会から寄贈を受けた。

※第二体育館

・ここには２階から、第一体育館は１階から入る。

・ここだけが唯一、暖房も冷房も入らない場所だ。ただ、避難所は第一体育館なので問題はない。

・用務庫が壁一面にあるので、かなりの量の用具が入る。

・ここで剣道部と卓球部と柔道部が部活動をやっている。

※第一体育館

・第二体育館より広く、キャットウォークも非常に幅がある。１周 150m 走れるようになっていて、雨が降っても雪が降っても走ることができる。

・Ｗｉ－Ｆｉが飛んでいるので、災害になったときにみなさんが情報を得られるようになっている。

・高さは 16mあり、大槌高校の体育館と同じ高さだ。

・天井は水銀灯ではなくＬＥＤなので消してもすぐに点く。ＬＥＤは頻繁に交換する必要がないから下に降りてこない。

・全部木でできており、鉄骨も何も入っていない。構造的にも全然大丈夫だ。普通のよりも逆に丈夫なくらいで、火災にも実は強い。表面が燃えても中まではなかなか燃えないようになっている。この厚さで全部集成材、うねが入っているのですごい丈夫だ。ゆがみも結露もない。住友林業で最大の部材を使ったということだが、木はメリットが多い。

・唯一欠点があるとすると、天井の梁にほこりがたまるのだが、暖房をかけると後からふわーっと落ちてくる。しかし、高すぎて掃除のしようがない。ドローンでも買って掃除をしようかという話が出ている。

・舞台の裏にも通路があり、余裕がある。当然だが、ステージには照明とスクリーンが常設されている。５段階で照明を落とせるようになっている

・いろいろな写真を貼り合わせて作ったモザイク画を飾っている。

・小池都知事が来て、ここでフラッグツアーをしていった。

・ここには暖房が入る。非常時も空気が循環するような形で 24 時間できる。

・ここは灯油で校舎棟は軽油なのだが、一晩暖房をつけると灯油 380 リットル位を使う。ただ１回温度が上がると木なので消えてもそんなに下がらない。暖めるまでがちょっとかかるが、キープするのに

はそんなに燃料がかからない。

・備蓄倉庫が併設されているので、鍵１本で体育館にも備蓄倉庫にも入れる。１本さえあれば全部出し入れができるという作りになっている。

・台風などにより大体年に３回は避難所を開設する。ちょっとした災害でも避難所を開設するということで学園長の私に連絡が来る。町の職員も来るが、どこに何があるのか分からないので私もずっと対応している。ただ、役場の方も知っておいた方がいいとは言っている。

※更衣室・トイレ

・多目的トイレと更衣室が大小それぞれあり、シャワー室がある。ここも木を使っている。ボタン１つで温水にできるので、子どもが使うのではなく、避難所対応として用意してある。

・更衣室は男女用があるので、かなりの人が来ても大丈夫だ。

・トレイにはホット便座が付いている。ウォッシュレットは付いてない。避難所対応としてお年寄りだと寒いのに弱いからヒーターも付いている。

質疑応答

★オープン教室は考えたのか**（たかざわ副委員長）**

⇒考えなかった。どうしてもうるさい。そういうのがある学校に行ったことがあるが、壁が外れて怪我をすることもあるということだった。

★特別教室は地域の方も使えるのか。**（事務局）**

⇒地域の方は廊下側から来て使っている。一番頻度が高いのは隣の調理室と井戸端会議室だ。

★生徒会長の選挙は１年生からやるのか。**（内田委員）**

⇒５年生以上がやる。

★プールは中学生もやるのか。**（事務局）**

⇒１～９年生までやる。フェンスから向こうが水深 90cm、こっちが 130cm、更に台を入れて 45cm にして低学年が使えるようにしてある。

ただ野生動物が多い。ハクビシンがきて糞をする場合があったり、カモが泳いでいたり、目の前にシカやカモシカが来ていたり、自然が近い。熊も普通にいる。

★建設費はどのくらいか。**（戸張委員長）**

⇒校舎で約 56 億円。グラウンドまで入れると 100 億円を超える。全部災害復旧の補助金なので、町は負担していない。土地の造成費用もかかっている。

委員・理事者の意見・感想等

★復興・防災を基盤とした「生きる力」「ふるさと創生」を推進する「ふるさと科」の取り組みを行っており、復興・防災関連では、９年生（中学３年生）が震災の経験を語り継いだり、８年生（中学２年生）が防災マップを作成している。また、「防災週間」として、ＡＥＤを活用した救急救命法、地域住民も参加する合同避難訓練、心の授業などを１週間かけて行っている。**（戸張委員長）**

★大槌町教育委委員会が学校、家庭、地域と一体となって進める総合学習「ふるさと科」も大変興味深い取り組みであった。ふるさと科は、地域への愛着、生き方・進路指導、大槌学園の小中一貫の取組みも地域を愛する心を育むという意味で重要、都市部千代田区でもそのような教育を考えてみてもよい。防災教育を中心とするものであるが、都市部千代田区にはないもののような感じがした。このような取組みが千代田区にあってもおもしろいなと感じた。

また、小中一貫教育の取組みは、小中学校のスムーズな接続、生きる力・ふるさと創生、開かれた学校づくりを主軸として、９年間を見通して「豊かな育ち」と「確かな学び」の保障を趣旨とするものである。教師が一方的に児童・生徒に授業をするのではなく、子どもたちの主体性を生かす形での授業スタイルが取られていた。**（秋谷委員）**

★地域の方々が学校に来られてワークショップをしていたが、リーダーの方は私たちに会うと満面の笑みで迎えてくれた。元気な地域の人々を見ると復興が順調に進んでいるのを感じた。**（小林た委員）**

★千代田区にはまだ取り入れられていない小中一貫の教育課程は子どもたちの環境は変化することと思う。中一ギャップ問題の解消、英語教育の充実、9 年間通した教育指導など、千代田区でも考えられるのか大変興味深い。**（池田委員）**

★平成 28 年竣工の校舎は総延床面積 13,000 ㎡を超える木造であり、資材の木材の 60%が地元の杉やカラマツを使用した。小中一貫校として、新しい歴史をつくっていく未来への懸け橋である児童生徒たちが伸び伸びと学んでいる姿が印象的であった。**（安田参事）**

伊藤教育長（写真左）と小石学務課長（写真右）

大階段、とても幅が広い

２階の廊下、
多目的な使い方ができる

１階の普通教室、
横長になっている

２階の普通教室、
机は高学年も同じものを使っている

図書室、９年分の蔵書があるので広い

調理室、避難所運営を想定して電子レンジ、
鍋、食器など、いろいろなものがある

理科室、椅子が机の上に置ける
写真右は松橋学園長

美術室、机の天板を立てることができ、
モデルを見ながらのデッサンが可能

こだわったという音楽室、
音楽室としては広く、設備も充実している

第二体育館、
サブの体育館だがこれでも十分に広い

第二体育館の用品庫、中はかなり広い

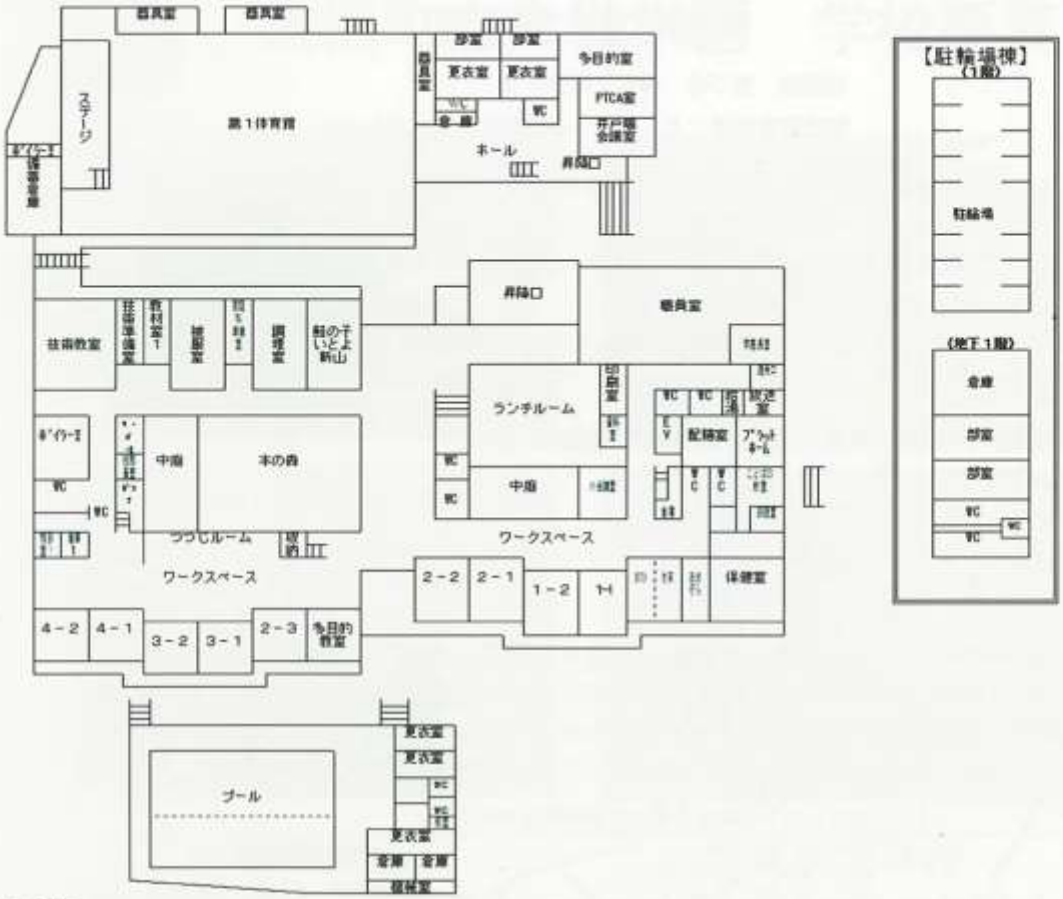
第一体育館、幅広のキャットウォークと
写真を貼り合わせたモザイク画

第一体育館、年に３回程度は避難所になるため、
さまざまな工夫が凝らされている

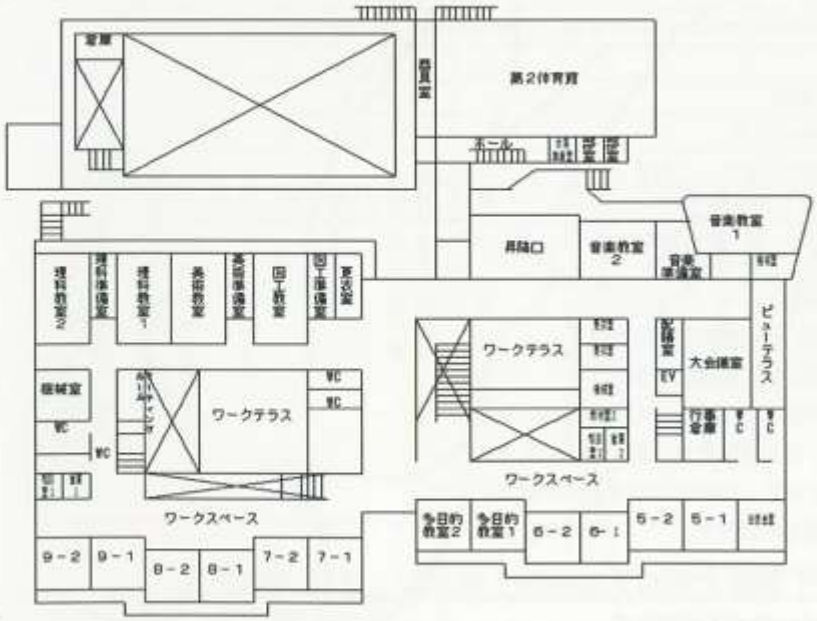
大階段で記念撮影

大槻学園校舎平面図

【1階】



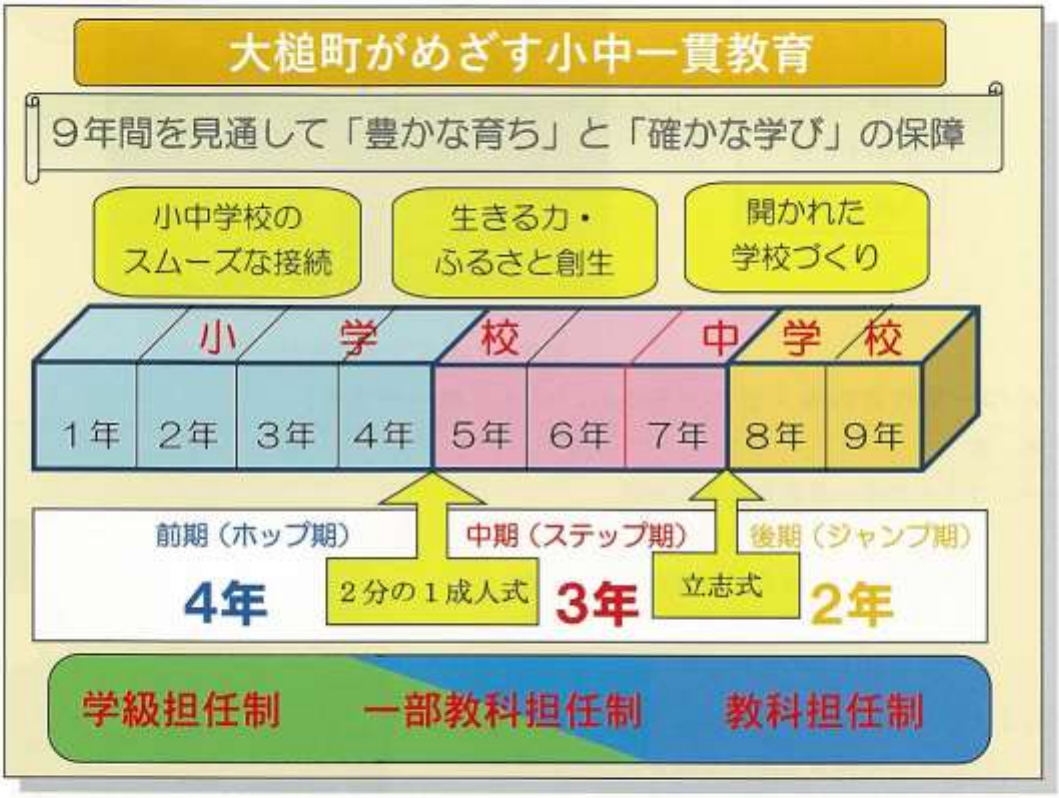
【2階】



Ⅲ　大槌の小中一貫教育

1　小中一貫教育の推進

（1）４・３・２制による９年間の育ちの保障



（2）大槌型３つのスタイル「授業」・「短学活」・「家庭学習」の推進

（３）大槌の小中一貫教育校

① 各学園の小中一貫の特色ある取組

ア 大槌学園

・授業時間　５～９年…５０分授業

・乗り入れ授業

　社会・音楽…６年（Ｔ１）

　外国語活動…５・６年（Ｔ１）

　数学…７年（少人数指導）

　体育…７・８年（Ｔ１）

・全教員による授業研究会

・９年間を見通した学習規律の確立

　（１日の生活の流れ、持ち物、ノート指導）

・合同行事（地区集会，避難訓練，

　校舎移転前の清掃作業，

　学習発表会と文化祭、

　始業式などの儀式的行事）

・運動会での９年生の支援

・５、６年生での定期テストの実施、

　２学期の３者面談の実施

・６年生の３学期の宿題を教科担任が作成

・まなびフェストにＰＴＡまなびフェスト

　を明記

大槌学園校章

全校での避難訓練

2　「ふるさと科」の充実

（1）「ふるさと科」でねらうもの

大槌町の復興発展を担いうる人材の育成

※「町外に出て活躍する人材」「グローバルな視野で活躍する人材」も育てる。

復興・防災を基盤とした「生きる力」「ふるさと創生」を推進

◆「生きる力」・・・・命やものの大切さと人の絆の大切さを受け止め、人としてのあり方や自らの生き方を考えみつめること。

◆「ふるさと創生」・・地域復興をめざすふるさとの中で自らの役割や責任を考え、ふるさとを支える担い手になること。

※「学校」「家庭」「地域」が一体となり連携・協働して実現していく。

（2）「ふるさと科」３つの柱

めざす子ども像

郷土に誇りをもち、社会の変化に柔軟に対応し、将来への夢や希望を描き実現へ向けて努力する子ども

目 標

探究的な学習活動や望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、地域の伝統や文化・自然を大切にしながらふるさとへの愛着を育むとともに、ふるさとの復興発展に向けて自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し行動しようとする実践的な態度を育てる

3つの柱

①

地域への愛着を育む学び

各学園の特色を生かした学び

- 地域の歴史や特産を学び、地域社会への関心を高め、主体的にかかわる態度を育成する。
- 郷土の文化・郷土芸能を学び、郷土への愛着心を高める。
- 町の復興発展をとらえ、ふるさとの将来像を見つめさせる。

②

生き方・進路指導を充実させる力を育む学び

将来の夢や希望を育む学び

- 郷土の産業や経済を学び、憧れをもち生き方や進路を考えさせる。
- 復興をめざす地域社会の中で自分の役割を理解し、主体的に将来を切り開く能力を育成する。
- 地域や多様な企業・団体と連携した職場体験により、生き方を考え実現しようとする態度を育成する。

③

防災教育を中心とした学び

命の大切さを見つめ、主体的に判断し行動する学び

- 郷土の自然・地形や災害、防災体制の意義について理解を深め、災害時や防災に対しての主体的な判断力と実践力を育成する。

「ふるさと科」は、「生き方」を基盤としたクロスカリキュラムだよ！

（３）具体的実践例

柱①【地域への愛着を育む学び】

『鮭の学習』（大槌学園）

大槌町の特産物である「鮭」をテーマに、ふるさとへの愛着を育んでいます。

５年生では生鮭を捌く様子を目の前で見学した後、それを使った料理づくりを行います。稚魚放流にも取り組んでいます。

７年生では新巻鮭づくりに挑戦。体験的に製作工程を学びます。

『わかめの学習』（吉里吉里学園）

大槌町の特産物「わかめ」をテーマに、ふるさとへの愛着を育んでいます。

７・８年生では体験的に製作工程を学びます。製品ラベルも手作りです。

完成した「塩蔵わかめ」は９年生の修学旅行時に販売します。製作の様子をタブレットでまとめ、販売会場で放映しています。

『町たんけん』（大槌学園・吉里吉里学園）

「はまぎく若だんな会」のメンバーを講師に、３年生が大槌の豊かな自然や歴史等を学び、郷土のよさを再発見しています。

「浪板不動滝」等、これまで知らなかった場所を訪れたり、土器を採取したりと、児童にとって探究心がくすぐられる活動満載です。職業訪問も合わせて実施しています。

『郷土芸能発表会』（吉里吉里学園）

発表会には、２００人以上の保護者や地域住民が来場。地域の文化・郷土芸能を学ぶことで郷土を愛する心を育成しています。昨年度に引き続き、地域住民と生徒らが４・５・６年生の指導にあたりました。３年生は郷土芸能について調べた内容を発表しました。

柱②【生き方・進路指導を充実させる力を育む学び】

「職場体験学習」(大槌学園・吉里吉里学園)

仮設商店街、スーパーマーケット、老人介護施設等、町内５０ヵ所の事業所の協力をいただき実施。学校支援地域コーディネーターが連絡役となり、一覧表にして学校に情報提供します。生徒自身がそれぞれ希望した職場で体験学習する過程で、生き方や進路を考えさせ、主体的に将来を切り開く能力を育成しています。

「キャリア講演会」(吉里吉里学園)

町内企業の管理職等に面接官をしていただき、「模擬面接」を実施しています。

校内で教職員が行う場合よりも格段に緊張感が増し、高校受験を控える９年生にとって貴重な体験学習になっています。

面接終了後は、面接官を講師に講演会をし、それぞれの職業観を向上させています。

柱③【防災教育を中心とした学び】

「防災週間の取組」(吉里吉里学園)

町役場の福祉課から、日本赤十字社の方を紹介いただき、講師として招聘してＡＥＤを活用する救急救命法を学んでいます。

また、実際にサイレンを鳴らしてもらう等、消防署にも協力いただいて、地域住民も参加する合同避難訓練を実施しています。

これらの取組の過程で、防災に対する理解を深めさせるとともに、災害時における主体的な判断力と実践力を育成しています。

なお、「防災週間」では「心の授業」も併せて実施し、一人ひとりの心のケアやサポートに留意するとともに、心情の変化に対する理解を深め、自分自身でできる調整の仕方を学びます。

（4）ふるさと科リーフレットについて

平成２７年度、主に「ふるさと科」で活用するリーフレットを作成しました。作成費用は、文部科学省事業「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」を充てました。

「ふるさと科リーフレット」の構成

		３つの柱	テーマ
1	Ⅰ-①	地域への愛着を育む学び	自然のめぐみ
2	Ⅰ-②		大槌の歴史
3	Ⅰ-③		大槌の伝統
4	Ⅰ-④		大槌の郷土食
5	Ⅰ-⑤		むかしの言葉やくらし
6	Ⅰ-⑥		大槌の自然
7	Ⅱ-①	生き方・進路指導を充実させる力を育む学び	まちをささえる仕事
8	Ⅱ-②		福祉を考える
9	Ⅲ-①	防災教育を中心とした学び	災害にそなえる
１０	Ⅲ-②		津波にそなえる
１１	Ⅲ-③		身のまわりの安全
１２	Ⅲ-④		人と人のつながり
１３	Ⅲ-⑤		大槌の復興

活用しやすいように設置を工夫

「ふるさと科リーフレット」作成の意義

「ふるさと科リーフレット」は、テーマ設定から編集に至るまで、学校・家庭・地域のメンバーで構成される会議を経て完成しました。

こうした取り組みが、復興に向かい日々変化する地域のコミュニティのつながりとなり、家庭・地域の教育力と生活環境の向上を図っていくと考えます。

「ふるさと科リーフレット」の活用

今年度（平成２８年度）から、「ふるさと科リーフレット」の具体的な活用方法を、各学園の実践発表を通じて検討しています。

今年度は「郷土芸能」調査活動や、「仮設住宅訪問」の事前学習として、大単元の導入段階時に活用した事例が多く発表されました。また、他県との交流学習時に、大槌町を紹介する際にも有効活用されました。

「座学ではなく、豊かな体験を通して」実施される「ふるさと科」の理念に留意しつつ、また、外国語活動・英語科の学習との横断的関連を図りながら、多くの活用事例を検証・共有し、さらなる充実を目指します。

Ⅳ　全体を通しての意見・感想等

（１）防災教育について

★防災教育で共通しているのは、「自分の命を守るため、これまでの前例や常識にとらわれず、主体的に判断・行動できる能力を高める」ことを目的としている点である。

　幼少時からこうした能力を高めていくことにより、一生涯使える「生き抜く力」を身に付けることができる。例えば、キャリア教育の中に、この「生き抜く力」という視点を取り入れることで、将来、社会に出たときに必要な能力・態度をより一層磨くことができるのではないか。**（戸張委員長）**

★施設などのハード面のみならず、震災の教訓を踏まえた防災教育などのソフトの面に関しても、素晴らしいものであった。生徒・児童が学校にいる場合のみならず、それ以外の場所にいる場合も想定しての避難訓練や防災教育、学校側の状況把握、救急措置、情報の収集、保護者への連絡・報告、勤務時間外の対応など、危機発生時の対応が本当に細かく徹底されていた。防災かるたなども使って防災教育をして、子どもたちの関心が高まるように工夫されていた。それでも震災を経験していない世代が増えていく中で、危機感を持たせるのは大変と言っていたのが印象に残っており、そういった点も含めて、千代田区でもしっかりと防災教育をしていかなければならないと感じた。**（秋谷委員）**

★いざ災害が起こった時にこれまでの避難訓練や防災教育の中身を忠実に実行するだけでなく、「自ら考え行動し命を守る」ことを子どもたち、地域のみなさんに伝える努力についても千代田で活かせる経験なのではないかと思う。もちろん、それを行うには自助共助だけでなく公の役割が大事だが。

（牛尾委員）

★被災地の学校教育は、防災対策を基礎にして防災教育を進めていることがこの地域の教育であると感じた。この地域の学校は、生徒・児童の受け入れ体制はできているのだが、残念なことに７年半経った現在、復興が進んでいても減少してしまった人口が思うように戻らないことがこれからの課題となっている。素晴らしい教育施設が完成しているので、多くの方々にこの地に来て教育を受けて戴けることを希望する。

　千代田区もいつ、災害に見舞われるかわからない。先ず、出来る事から始めなくてはならない。今回の調査から、災害が起きる前の対策として子ども達の目線で地域の方々を含めて防災教育を始めなくてはならないと感じた。子どもも大人も全員参加で防災マップを作成することから始めたら良いのではないかと思う。**（小林た委員）**

★大きな体育館での防災訓練を定期的に行い、避難訓練、避難所訓練に加え、登下校中での防災訓練は非常に効果的だと思う。都心部千代田区でも登下校時の防災対策、訓練は必要だと思った。地域の方や在勤者にも協力してもらい大規模な防災訓練の実施を期待したい。また、各所で行われている避難所訓練も今後工夫が必要かと思う。状況が変化することを想定した訓練も子どもたちにも体験してほしいと思う。全校では行っていないが、通学路で危険な箇所や場所を自分たちで探索することは大切だと思う。

　子どもの目線の防災マップは些細なことに気が付く。千代田区でも実施している学校はあるが、全学校で行えば千代田区全区を網羅できるのではないだろうか。**（池田委員）**

（２）教育施設について

★震災後に統合・再建された高田東中学校（陸前高田市）、越喜来小学校（大船渡市）、大槌学園（大槌町）には、震災の経験を生かしたさまざまな工夫が凝らされている。

・避難所開設中でも十分な教育活動が行えるよう、体育館を避難所として明確に位置づけ、校舎棟と分離している。

・体育館は道路側に配置し、外部からの救援物資の受け入れるための開口部を設けている。また、体育館の向かい側に家庭科室を配置し、炊き出しした食事を容易に運べるようにしている。

・職員室や家庭科室、体育館等に太陽光発電で使用できるコンセントを配置し、停電時も防災無線による情報収集や避難所運営、電子レンジによる調理ができるようになっている。

・下水道直結型トイレ（マンホールトイレ）や雨水のトイレ洗浄水への再利用など、災害時でもトイレが使用できるようになっている。

千代田区では今後、老朽化等により多くの教育・保育施設が更新時期を迎えるが、こうした工夫は、施設整備の際に大いに参考になると考える。**（戸張委員長）**

★震災後に再建された教育施設における地域の防災拠点としての機能に関しては、震災時の体験から発想を得たものが多く取り込まれており、関心するものばかりであった。一義的に教育施設である以上、子どもたちのびのびと元気に学ぶことができる場であることに対する工夫も多くなされており、それらはもちろん素晴らしいものばかりであった。

しかし、何よりも有事の際の地域の避難所としての機能を有する体育館、避難経路がしっかりと考えられた動線の確保、防火扉の設置方法、大型車の通行が考えられた校舎等の施設の設計、本棚や備品の設置方法の細かい点の工夫など、一つひとつが本当によく考えられたもので、それらが有機的に関連することで、優れた防災機能を発揮するのだと認識させられた。**（秋谷委員）**

★教育施設の再建も地域の防災拠点として位置付けるなどまちづくりと一体で行っている姿勢は千代田区の教育施設の建て替えの時にも学ぶべき点があるのではと感じた。**（牛尾委員）**

★防災対策を最初に重点的に考慮した施設づくりからスタートしながら教育に対しての心こもった配慮が様々な箇所で見られた。学校施設は、高台にあり見渡しが良く校舎全体が明るいつくりになっていた。新校舎は、どこも木材をふんだんに取り入れて、その場所で過ごすことが木のぬくもりを感じるつくりになっていた。学校が災害対策の拠点となっており、太陽光発電システム、非常用発電機、防災備蓄倉庫などに併せて、子どもが参加して防災マップ作りなど防災教育が組み込まれている。

（小林た委員）

★被災し新たに誕生した学校はすべて素晴らしく、防災対策、防災教育には地域との連携をしっかりと図り子どもたちもそれに順応してきたと思う。

高台に移転した学校内を見学できなかったのは残念だったが、多方面から注目されていることと思う。校内の図書室の作りも参考に見てみたかった。**（池田委員）**

★東日本大震災から７年半が経過したが、被災地はまさに復興中と言った感じであった。今回は教育施設の視察であったが、教育施設に求められる機能が大きく変わってきたことを痛感した。地域の防災やコミュニティの中心としての役割が、被災を受けた経験がしっかりと施設整備に反映されていた。

（内田委員）

★８月２８日から３日間、子育て文教委員会の国内行政視察に随行し、岩手県陸前高田市、大船渡市、大槌町、釜石市の教育施設を実際に見ることにより、多くのことを学び大変有意義なものとなった。

街の復興は着実に進んではいるが、海沿いはどこも高い堤防は完成しているものの堤防の内側は広大な何もない土のままで、そこに沢山の重機がはいり土木工事をしている状況である。

このような状況の中で各自治体がいち早く復旧に取り組み新しい施設が出来上がっているのが教育施設である。震災当初は校舎が津波で使えなくなった学校が、津波の影響を受けなかった学校に間借りをするなど、やりくりをしながらの出発だった。そのうえで、各小学校の統廃合を行い新しく学校を、津波がこないように山を削り、高台に作った。

大槌学園は、大槌小学校、安渡小学校、赤浜小学校、大槌北小学校の４校が統合して新生「大槌小学校」を開校し、大槌中学校も一緒になり小中一貫教育校大槌学園となり新校舎も出来上がった。大船渡市の越喜来小学校も、崎浜小学校、甫嶺小学校、越喜来小学校の３校を統合し、山を削り標高５２メートルに４万６０００平方メートルの土地を造成し新校舎を建築した。陸前高田市の高田東中学校も高台に３万４０００平方メートルの土地を造成して新校舎を建てている。各自治体では学校の再開と復旧を第一に考え、子ども達の命を守るために津波のこない場所に新たな小中学校を作ることを優先して取り組んできた。

未来を担う子供たちに、夢を与える学校を作り、街の復興のシンボルとして人々に希望と誇りを取り戻しているように思う。改めて、学校は地域の核であり、地域と共に歩んでいることを実感した。

（大矢部長）

（３）その他、全体を通じて

★今回の調査先に共通する課題としては、

・震災から７年が経過し、避難訓練も定例化している。学年が上がるにつれ、訓練に対する真剣さも薄れていくことから、実践的かつ真剣な避難訓練が必ずしも行われているとは言い難い。

・今年小学校に入学した子は震災後に生まれており、震災を知らない世代が徐々に出てきている。震災の記憶を語り継ぐことは非常に重要だが、震災を契機に人口減少・過疎化がより一層進んでおり、伝承が困難になってきている。

などが挙げられる。

人口流出に歯止めをかけるため、各市・町とも防災教育とセットで郷土への愛着を育む教育にも積極的に取り組んでいる。越喜来小学校の伝統芸能（学区域内の各地区に伝承されている剣舞｛けんばい｝）の体験・引継ぎや大槌町の「ふるさと科」の取り組みがその例である。

郷土を愛する気持ちの育成を通じ、将来的にはＵターン人口や関係人口（例えばふるさと納税を行う、ボランティアで短期間移住するなど、他地域に住みながらも自分に関係する地域を応援する人）の増加を図っている。

現在、千代田区は人口増加の局面にあり、こうした地域とは対照的だが、人口の流動性が高く、地域コミュニティの希薄化が懸念されている。地域への愛着心を育てる教育は千代田区においても必要であり、伝統芸能の継承や「ふるさと科」の取り組みは参考になるのではないか。**（戸張委員長）**

★「東日本大震災」から７年５ヶ月が経過したが、高い堤防が海への視界を遮り、至る所で地盤のかさ上げ工事が行われており、いまだに大槌町では 2,000 人弱の方々が、仮設住宅で暮らし、県外へ避難した人で帰らない人も多く、改めて被害の大きさを認識した。**（たかざわ副委員長）**

★調査全体を通じて、東日本大震災から７年が過ぎ、今なお被災地の復興は道半ばであると同時に震災をしらない世代が小学校に入りこれから成長していくなかで、「震災の経験を風化させないために何

が必要か」を問い続け、試行錯誤しながらも努力を続けている姿に感銘を受けた。

今回、調査に参加し被災地の状況は実際に自分の目で見ると深刻さが身に染みて分かった。また、復興や経験を次の世代に引き継ごうと言う情熱を感じとても良い経験になった。

意見としては調査の日程が連続していたこともあったのだが、もっとじっくりと話を聞く時間があれば、より幅広い経験、思いなどが聞けたのではと思う。**（牛尾委員）**

★東日本大震災による津波の直撃を受けても残った「奇跡の一本松」陸前高田市気仙町の高田松原跡地に立つ松のモニュメントを見ると津波の激しさが実感できる。奇跡的に一本残った松に希望を持ち続けたいと思う。**（小林た委員）**

★一本松茶屋で営業を再開した醤油製造者に会うことが出来なかったのが残念だった。再度訪問し激励をしたいと思っている。

津波によって被災し、いくつかの学校が一つに統一され新たな校舎で新生活が始まっているが、家族を失った子どもたちの心のケアの取り組みについてもう少し聞きたかった。多感な時期でこの地で生活を続けていく以上、つらい思いは消えないと思う。いじめや不登校などの問題とは違い、家族を失った気持ちは当事者でないとわかりえないところをどのようなフォローをしているのだろうか、心配される。

学校内学童クラブの活動や地域の交流室の活用など、家族以外の大人とのコミュニティの大切さは千代田区でも同じことかと思う。両親が共働きのため、学校が大きな意味を持つと思う。地域が子どもを育てる、守る、核家族化が進む千代田区では難しいことかもしれないが、参考にしたい。

（池田委員）

★海岸線には防潮堤が作られ、海が見えなくなっていた。防潮堤を作っても、また想定外の津波が来るのではないかと疑問である。コンクリートで海岸線に塀を作る街づくりが本当にそこに住む人々にとって最適な施策なのか？疑問であり、今後の津波被災地のまちづくりの動向をこれからも注視したいと思う。**（内田委員）**

★今回の教育系調査先では防災教育と現場の判断で学校に居た生徒教員に被害はなかったが、他地区では津波の犠牲者も多くあり、この経験を後世に繋げ犠牲者を出さないように語り継ぐことが必要と思った。**（小林や委員）**

★未曽有の大災害の甚大な被害からの復旧過程と児童の健やかな育成を両立させていくためには教育環境のハード面はもとより、児童生徒に寄り添ったこころのケアが必須である。調査した各校とも、この点には十分配慮しながら、新たな歩みと発展を目指していく姿に心打たれるところが多かった。

（安田参事）

Ⅴ　まとめ

今回の調査で訪問した各市町は、東日本大震災の大津波により甚大な被害を受けた地域である。沿岸部では、防潮堤や水門の工事が急ピッチで行われているものの、道路だけが整備された平野が広がっており、復興は道半ばということを思い知らされた。

震災は直接的な被害だけではなく、仮設住宅から管外への移住など、人口減少にさらに拍車をかける結果をもたらしており、引き続き温かい支援が必要であると実感した。

そうした状況でも、子ども達は明るく、礼儀正しく、そして元気に挨拶をしてくれた。子ども達は地域の希望であり、地域コミュニティの核であり、未来を担う存在である。故郷を愛し、復興のバトンを渡せる人材を２０年先、３０年先までを見据えて育てていこうとしており、復興における教育の重要性を改めて認識した。

防災教育においては、依然として心のケアが必要な子どももいる中で、二度と悲劇を繰り返さない、この経験を後世にまで語り継いでいくという強い決意のもと、座学はもとより語り部活動や防災マップ作成、リアルな津波避難訓練など熱心に取り組んでいた。

教育施設については、木材をふんだんに使い、温もりが感じられる校舎であり、震災時に避難所となった経験から、体育館を避難所と位置づけ、電源、暖房、トイレ、炊き出し、物資受入など、さまざまな面で感心するような工夫がなされていた。

今回の調査で得た知見を、今後の委員会での議論に活用していきたい。

千　代　田　区　議　会
子　育　て　文　教　委　員　会
国内（管外）行政調査報告書
平　成　３　０　年　１　２　月